

冬 雷

短歌雑誌

TOURAI



二〇二四年十一月一日発行（毎月一回）日発行
第六十三卷第十一号（通巻七五三号）

11月号・2024年

お知らせ

令和七年一月号より、掲載作品欄の異動がありません。左記の通りですが、伴って担当選者も変わる場所もあります。投稿規定で確認の上、間違わないようにお願い致します。

冬雷集欄へ 井上 慎子氏・野村 灑子氏

作品一欄へ 江藤ひさ子氏・斎鹿ミヤコ氏

佐藤 靖子氏・鈴木 計子氏

須藤 紀子氏・松本 英夫氏

三好 規子氏

作品二欄へ 井上 鈴子氏・谷田 律子氏

津田美知子氏・松崎みき子氏

水澤タカ子氏

*一月号用原稿の締切日は、十一月十五日です。

〈冬雷短歌会〉

11月号 目次

冬雷集	1
作品一	15
十一月集	32
残響集	38
作品二	44
作品三	53
九月号冬雷集評	山本三男 14
外塚 喬歌集『不変』を読む	大山敏夫 28
島木赤彦の一首鑑賞7	村上美江 29
九月号作品一評	小林芳枝・藤田夏見 30
九月集 / 残響集評	大山敏夫 37
九月号作品二評	井上菅子・江波戸愛子 40
九月号作品三評	桜井美保子・橘 美千代 42
九月号十首選 (冬雷集・九月集 / 残響集)	44
九月号十首選 (作品一・作品二・作品三)	46
歌集・歌書紹介	佐藤靖子 49
訃報 (つつしんで短歌の友らを送る)	編集室 54
ネット歌会をしよう	57

冬雷集

大山敏 夫 埼玉

宮崎県日向灘震源の地震あり一メートルほどの津波伝へて

マグニチュード7.1地震以後余震南海トラフ巨大地震注意の報出づ

南海トラフ「巨大地震注意」の太き文字貼る画面には動くパリ五輪の中継

金メダル奪取に沸き立ち揺るる画面南海トラフ「巨大地震注意」の太文字の横

南海トラフ「巨大地震注意」出でゐるなか神奈川西部に地震あり震度五といふ

南海トラフとの関連を否定しをれども相模トラフ地震のことふれの揺れ

相模トラフの引き起こしし関東大震災それより一〇一年目の令和六年

南海トラフ「巨大地震注意」の太き文字貼るテレビ消し水を買ひに出る

咲き盛るさま

赤羽佳年 東京

朝の日の未だ整はぬベランダに松葉ボタンは半開きたり

ベランダに昨年蒔きし松葉ボタン放置の俣に昼盛んなり

全くの雲無き空より降りそそぐ真夏の日差し影を濃くする

杖突きて家出たものの投票所の聊かの坂登れず返る

候補者の名も顔も見ず七夕の都知事選挙は棄権ときむる

ぼつてりと花びら重ねて咲き盛る培はれたるダリアに見入る（ダリア園に遊びし時）

自らの重みに垂るるダリア咲き添へ木ごと揺る天つ日の下

ポンポンと咲き盛るさま見事なり園丁惚れ惚れ見とれてみたり

赤間洋子 東京

売値変はらぬ日用品のあれもこれも内容量減り実質値上げ

猛暑故に中止してゐるウォーキング脚力衰へ記憶力まで

近頃は小さき失敗多くなる歳の所為かと半ば諦め

教へ子より貴重な新米届きたり漸く買へた半分を我に

折にふれ我に氣遣ひくれること感謝しながら新米を炊く

新米には秋刀魚と思ひスーパへ一尾欲しいが二尾で千円

頭取り焼いた秋刀魚も並んでるレンジ加熱ですぐ食べられるが

単調で無言の日々の独り暮らし楽しみのひとつが料理すること

兼目 久 栃木

夕方の強烈な陽に照らされて雲は純白に転じ輝く

台所の勝手場は暑しプロパンガスの煮炊きするのも更に加はりて

信号のそばに生ひたるセイタカアワダチサウ人の丈ほど伸び信号見ずらし

フラスコに酒をあため出しくれぬ批評の後に師は笑ひつつ

先生にはてつこもり盛つたと焼きそばを声をはづませ児童ら言へり

「乙女の祈り」「エリーゼのために」が弾きたくて教師になりてピアノを習ふ

来年に花を咲かせる準備なるか葉に養分をたくはへ青し

肉太く顔真卿の建中告身帖生命力に満ちあたたかさあり

山崎英子 東京

み社の鳥居を越えて濃みどりの樹々に囲まれ大屋根さ緑

日々坐る席に目に入るスカイツリー六三四メートルは高し

真正面に見ゆる楽しさに天辺に点る夕灯り待つ時のあり

夕五時十五分スカイツリーに灯が点る一日穏やかにして

いつも来て止るカラスを待ちあたり大き羽揚げひけらかす如く

子ガラスも来る何か楽しく話す如くにしばらくとまる

森藤ふみ 東京

入浴剤シュワシュワ音立て溶けてゆく今夜の風呂はラベンダーの湯

貼り紙の剪定案内見落として鋏の音聞き濯ぎもの干す

テーブルに束の間突つ伏し顔上げる壁にピタリと守宮の張り付く

ガラス戸もぴたりと閉ざし隙間なき部屋に何処から入りきた守宮

新聞紙丸め守宮を上を押すカーテンレールの隙から消えたり

朝からの強き日の差す部屋の戸とカーテン閉ざしたままにしておく

起きぬけの娘は空気入れ替へと言ひつつカーテンガラス戸開ける

濯ぎものとうに乾けるベランダにまだ出たくなし日の陰り待つ

友・ヒラノさん

櫻井一江 東京

友からの携帯電話は友では無く話す相手は娘さんのこゑ

イギリスに住まふ筈なる娘さん帰国し母の病室からと

日曜の町内イベントに共に出て翌日ヒラノさん昏睡状態とは

曾孫の顔見られるは長生きの証拠よ写真見せつつ喜びし友
町会の祭り盆踊りの寄附名簿友の筆にて都度書かれけり
酒店をビルにし後のヒラノさん自由なる時を周囲に施し
九十二歳をこれほど多くの皆さんに感謝あふるる喪主の挨拶
震災と福井地震を経し友の遺影は和服の優しき笑顔

有 泉 泰 子 山梨

夏休みに入るやすぐにタイにての課外授業へと女孫旅立つ
勉強の合間をぬひてタイの気を体中浴びみるとメールの届く
真白なYシャツネクタイ姿にて就職説明会の帰りと孫の来る
Tシャツに半ズボン姿も卒業かネクタイしめて社会人近し
来春の成人式に母さんの着し振袖を着たいと純野あののくる
アルバムに残る娘の振袖姿みつつ三十年の日々ふりかへる
娘着しピンクの振袖孫の着る嬉しきことよ成人式待たる
「またくるね」「さよならさよならハイタッチ」幼なより続け帰りいきたり

富 田 眞紀恵 富山

老たちの笑顔あつめてコスモスの花がほほゑむ施設の午後は
大空に大きな花火の音はじけ老も若きも空を見上げる

青 木 初 子 神奈川

住民票書類二通に取れるのに戸籍謄本は顔写真要ると
二種類の書類揃へど顔写真付かねば吾を認めざると云ふ

高齢者にちつとも優しきなきき制度顔写真付きのカード作れと
なぜ急ぐチェック体制まだまだに甘きままにて登録せよと
通帳に引き落される夫名義の書類集める吾に変へむと
午前中書類集めの電話掛け音声アナウンスに時間のかかる
要件の合ふ番号を押せと云ふ音声アナウンスに耳そばだてる
長きこと要あらざりし銀行印朱肉の赤の綺麗に付かず

黒 田 江美子 千葉

「応答がありませんでした」亡き姉のラインに遺る表示を消せない
物言ひの明快なれば亡き後も姉の幻に我は惹かれる
相談と言ふほどもなき起き伏しを語り合ひたる日々も糧なり
回し読みの新刊本と干菓子入りのレターパックはもう届かない
十年なる病あれども服薬と地域活動に発症緩やか
響き合ひ悲哀に深く生かされて世代間連携の活動続けむ
高齢者グループ集ふ学校に孫と行き交ふ福祉体験日

橋 本文子 鳥取

会ひたいと口にはせずには元氣な声楽しむ電話姪と私
県境越え海越えて会ひに行くことむつかしと互ひに思ふ年になりたり
庭のゆずジャムにしたと電話あり元氣確認ただ嬉しくて
米子市の伝統火ぶせの神事見に進む郊外の道月光の道
セントロマントロと土地の人守り続ける静かな神事(千灯籠万灯籠)

児童養護施設への寄付を募りつつお笑いタレントやす子が走る
施設出身隠すことなく恩返ししたいと口にすやす子愛し
にこにこと走るやす子の中継に見る見る上る寄付の金額
全国の児童施設に無事届けやす子の熱意に集まる四億
若き頃童話の本を携えて児童施設の子等と遊びき
三月^{みつき}越し真夏陽続き照り返す駅までの道日傘手放せず
新学期始まり下校の小学生小さな帽子に真夏陽燦々

中 村 晴 美 茨城

風予報三十メートルに駐車場のポリカーボネート屋根は崩壊の危機
米不足テレビは騒ぐが直売所は行けば買へる今まで通り
古き米も値崩れなく良く売れて米農家はラッキーな年なり
玄米で三十キロの新米買ふ炊く直前の精米は旨し
二年前合はず断念せし遠近のコンタクトレンズに再挑戦す
あつさりと遠近両用コンタクト馴染む不思議な還暦の夏
植多替へをしたき鉢が数個あり暑さに負けて放置の九月
暑き空なにかが揺るる蜘蛛の巣に蜻蛉一匹暴れてをりぬ

山 口 嵩 福島

十数分激しく降れる雨去りて暫しの涼に窓あけ放す
涼しさもほんのいつとき昼下り寒暖計は真夏日越せり

朝方の曇れる空にほつと為るも午後の日射しに人影まばら
輪唱か合唱なのか音域を微妙に変へて蟋蟀鳴きをり
一瞬の間を取りあつて全パート夜に満ちゆく虫の音とよむ
これまでと同じ気温も何かしら過ごし易さを招く虫たち
此れまでのことは何処かに追ひ遣つて総裁候補九人の視線は

吉 田 綾 子☆ 茨城

盆近し古き盆棚惜しみつつ仕様簡素な盆棚を求む
十五畳の仏間に設う新しき盆棚すこし小さく見ゆる
仏壇の位牌等を外に出しひとつひとつを孫は清める
仏壇に位牌、過去帳、調度品 工夫をするも盆棚きつし
新盆棚の居心地いかに思うらん仏花を供え香を焚くなり
御仏に供える食事の献立表脳裏に描き都度都度つくる
仏膳の煮物、和え物、香の物 質素なれども思いの籠る
御仏の帰りのお土産団子をば私が作ると孫の挑戦
待ちいたる盆の終りて名残惜し精魂込めて盆棚たたむ

良寛旧跡探訪

天 野 克 彦 大阪

良寛に触れんと来たる出雲崎松の木の間にわがひとり居つ(良寛堂)
高みより良寛堂を見おろせば背向そがひに霞む佐渡の島山(石井神社)
そのかみの良寛坊を想ひつつ汗して登る国上の山を
良寛坊行き来の山道ひとところ清水湧きをり掬ひて飲みぬ

良寛さま起き伏しなされし跡どころ夢こちして佇みゐたり（五合庵）
五合庵前の根株に足取られ転べることも想ひ出とせん

「良寛上人遷化之地」の立て札を横目に見つつ通り過ぎたり（木村家門前）
貞心ていしん尼墓所に詣でて口ずさむ「はちすの露」の相聞の歌（洞雲寺）
詣で来る人は稀らし墓石はすこし傾き落葉に埋まる

北海道ひとり旅（登別〜室蘭〜地球岬） 高松 美智子☆ 栃木

訪日の中国人客と押し合いて荷物抱えて乗る路線バス（登別駅）
登別バスターミナルの若き女性流暢な英語で訪日客を捌く

間欠泉が脈打つごとく湧き上がる源泉公園足止めて眺む

あちこちに噴煙上がりて硫黄匂う木道たどりて源泉の湧く（登別地獄谷）

伊達時代村の勤め帰りという女性と室蘭までの一期一会（室蘭本線）

地元人が教えくれたる室蘭のカレーラーメンの味噌味をひとつ

路線バスふたつ乗り継ぎ一キロの山道を登り地球岬へ

ひと月をかけて道内巡るといふ岡山の御夫婦のセカンドライフを聞く（地球岬にて）

線路際に海岸見下ろす室蘭本線穏やかな海にもふと浮かぶ恐怖（室蘭〜洞爺湖）

高橋 説子 栃木

三・六キロ端から端まで歩きたり最初で最後と天の橋立

自転車で追ひ抜く人を「転べ転べ」と念じたりして天の橋立

休憩は龍の心臓の辺りかも海をあひだの一本道ゆく

押すなよと笑ひつつ股覗きせり龍には見えぬ天の橋立

草も人も群れると強さ増しゆきて境界線を軽々と越ゆ

蕾のまま向日葵さへも枯れる夏サルスベリだけが花として咲く

人工の風を浴びつつ猛暑日を不登校児のやうに家に居り

真夜覚めて宿のテレビに観る決勝フェンシング団体日は昇りたり

BSの昭和ドラマに黄泉の国の人は美しき日本語を話す

大塚 亮子 東京

朝々に大きく鳴き出す蟬の声いつよりからか虫の音となる

引越しに挨拶交したるのみに以後隣人に会ふこと非ず

生活時間違ひたるらしエレベーターに独り乗ること多しと気づく

知る人の無けれど参加すると決め防災訓練の貼り紙を見る

震度の違ひ説明されて起震車のテーブルの下に揺るるを待ちぬ

一寸先見えぬ煙の中にもて手さぐりに出口をやうやく探す

担ぐには小きが良しと背の低きわれが担架に乗ることとなる

担がるる担架に乗るは暑かりき地面に置かれ汗の吹き出す

やらぬより良しと思ひて参加する指示の通りに訓練終了

豪雨 嶋田 正之 埼玉

大丈夫 遠くの友より電話くる豪雨被害のニュース見たると

九百二十五ヘクトパスカルと初めて聞く台風十号

身構へて居れどもろのろ台風は熱帯低気圧となりて大雨

だんべーの郷の方言消え失せる先祖の墓より見下ろす家並

神主の祝詞聴きつつ集ひたる実家の行事絶えて幾年
毎年の墓参いつまで続くやら柏手を打ち見上ぐる蒼空
齡とはかくも苛酷なものならむ出来なくなる事日々に増しゆく
八月の初旬の空の翳雲奇しくも今日を立秋と呼ぶ
年ごとに最高気温の上りゆく地球沸騰と言ふ人の居て

江波戸 愛 子☆ 埼玉

月一度つづけてきたる食事会まちどおしいと言ひし友逝く
一枚にもう一枚をつなげたりゴミ集積所の鳥よけネット
在りし日のちちとははとの想い出を語りくれたる人の逝きたり
間違いのあれば知らせてくださいと記して町会地図の回覧
防災の訓練あとの反省会アルファ米を食すと決まる
保存用の真空パックのビスケット夫はあけて食べ始めたり
いく年も前に詠みたる風車ことしも回る色褪せたれど
水道のパッキン娘が取りかえているのを見ている夫とわれと

町 田 勝 男 埼玉

ああ疲れた言葉になれば本当に疲れたやうな散歩の終り
満天の星空ひさし彼岸前はだへに清しはやも秋風
いつの日かジュース飲んだね「さいぐんと」こは三県の境界なると
妻の実家亡義父焚きくれし五右衛門風呂庭の真ん中四啊あづまやの風
朝なさに伸び来る蔓をたたき伐り明けの舗道に空き缶拾ふ

足元に戦火無けれど外つ国の絶えぬいくさよそれでも愛を
死はつねに生のとから付いて来る追ひ越すことも或いは在りか
臨終の寝相は自分でどもならぬ何かの力にまかせる他なし
「わが心のジョージア」「愛さずにはゐられない」レイチャールスも老耄のかなた

稲 田 正 康 東京

金魚いくつ描く絵のうちに書かれある夏といふ字にやうやく気づく
七月の壁かざりをる朝顔とほほづきのオレンジやや大きすぎ
お祭の提灯屋台に並ぶもの貼らるリハビリ八月の室
丸のまま切り分けしこと思ひつつブロックといふ西瓜買ひ来る
風景のポイントなりしこの街の黄の壁けふはなくなりてをり
コーラスに加はれといはる持続する感覚いまは足らぬと思ふ
メシアン作「トゥランガリラ交響曲」壮大な無駄のやうにけふはなぜか
父生れし日のラヂオ体操父生れし鳥取より実況なすとぞいへる

橘 美千代 新潟

体重の減り十パーセント未満なり胃癌切除後二ヶ月の母
体重の減り防がむと胃切除の母にきびしく食べさせきらはる(胃癌幽門側胃切除)
骨折部の抜釘手術うけむわれ世話かけられぬと母は自宅に
いくたびも稲妻はしり降りきたりワイパー効かぬ凄まじき雨
稲妻はしるたびに激しきます雨に視界きかぬも車止まれず
ゲリラ雷雨のなか車駆けやうやくにハイウェイおりてコンビニに入る

一日に二カ月分の雨がふる異常気象は地球の反撃
母作るはカロリー足らぬと昼休み母の夕食いそぎ調理す

ブレイクあざさ☆ カナダ

ドクターの英語はすべて聞き取れてただ追いつかぬ意味の消化が
ベイスギの山の暗さよ眺望も青空もなし行けども行けども
人生に例えてみようかベイスギの険しき斜面に進めず戻れず
森にあれば王者の系譜のヒグマの子うとうとしており囲いの中に
オスのほうが獣も人も優しいとケイリー・グラント言いと夫言う
大鍋に夫の煮たるりんごの香満ちて諍いどうでもよくなる
お会いする望みとうとう叶わずに水谷さんの訃報を見つめる
大会でお会いしましょうそう言って切りし電話が最後となりぬ
良い歌もあるとぞ励まし下さりし関西弁の声忘るまじ

姉 川 素枝子 福岡

一筋の飛行機雲がくづれゆく春振の嶺に日のおちるころ
散歩する男が杖を腰に当て窓の下ゆくいつものかたち
下呂温泉に泊まられしこと聞きたりしその下呂の火事この夜のニュース
厠にて火災報知機なりはじむあわてて避難するきになれず
誰そボタン押したかいさ知らず避難する声せぬ施設内
左に杖右手を息子に握られてなほよたと車に乗り
玄関の鉢のライラックをはりたり吾に来る春ありやなしやも

黄泉平坂といへるところのあるといふ人や吾やも歩くやいなや
保湿膏ぬりくるる子呟けり俺のみし乳も干涸びちやつた

井 上 菅 子 山形

水槽に囲まれ海にあるやうなレストラン楽しき思ひ出にあり
白桃の傷昨日より広がりに夏のテーブルの上を重くす
木材を積む特別なトラックが吊り上げ機材も積み走りぬ
仏前に供ふる蓮に朝のきて約束に添ひ大輪開く
この世には見られぬ花も造花にて華やかに売る百円ショップ
どこまでも晴れて雲無し盃蘭盆に訪ひゆく家ももう血が遠し
今日の失敗三つを簡条書にして再発防止になるかならぬか
オーナーの夢を感じて食べに行く畑の中のパスタレストラン
暑くても寒くても人はその節の飲み物を買ふコンビニのレジ

原稿募集

編集室では、会員の皆様から左記
のテーマによる原稿を募ります。

先ず作品一首を二行分でお書き
頂き、その後に、
*本文 25字×17行
*尚、掲載について細部はご一
縮切日は、毎月15日とします。

●島木赤彦の一首鑑賞
皆様が赤彦作品ならこれを選ぶ
という一首について自由にお書

●宛先は編集室。

貴方を歓迎します

冬雷ホームページのネット歌
会に参加しよう。希望する
二首を選んで、事前に申込み
ます。活発に動いています。
(広報係)

参加希望者は「広報・桜井美保子」
宛に最新号掲載作品から2首を
選んで申し込む。批評を受け、自
身も批評に加わることが出来る。
小誌ホームページにて今までのも
のが閲覧できる。ご活用を。



食の好みなども変化しそれよりも体重四キロ減のことは喜び 大山敏夫
三句目のそれよりもという接続詞が巧みだと思えます。上の句と下の句の関係を曖昧にして、体重が減った喜びがうまく表現されています。筆者のように痩せている者にとっては羨ましい歌です。

独居でも手抜きをしない食生活料理が好きて楽しみである 赤間洋子
一人暮らしの生活は、誰からも文句を言われることがないので怠けがちになりそうですが、手抜きをしないできちんと料理をしていることが歌われています。結句の「楽しみである」という断定的な表現に感心しました。

勝鬃橋の塗装工事の掲示板週休二日制 櫻井一江
確保の工事と明記 櫻井一江
近年、一般企業などでは週休二日が当たり前になっていきます。建築現場などではまだのこと多かったのですが、それを

改善する動きが進んでいます。現代社会の一面を捉えた一首です。

四年生就職活動中なるに思はぬ試練杖つき乗り越えむ 有泉泰子

就職活動中とあるので、大学四年生でしようか。大切なときに骨折をしたお皆さんの心が心配ですが、きっと試練を乗り越えるだろうとの思いでしょう。作者の豊富な人生経験を感じます。

米洗ひとぎ汁まけば雀きて我的庭は雀の食堂 橋本文子

米をとぐという日常の現実的な描写から始まって、結句では童話のような世界が開けてくる魅力的な作品です。作者の優しい思いが伝わってきます。

住み慣れしわが家に戻り安堵してゐるらむお骨を祭壇に置く 大塚亮子

故人に対する思いの深さを感じる作品です。「祭壇に置く」という結句には故人に対する様々な思いが込められているのでしよう。

ひまわりの花を大きく写したる画像を君のラインに送る 江波戸愛子☆

かつては、写真は紙に印刷した物でしたが、今日では電子データとなり、何処にでも送れるようになりました。海外に行くお孫さんに頼まれたひまわりの鉢をそのまま育て続け、花を咲かせた作者のお人柄を感じる作品です。

「沈黙の春」におとらぬ温暖化わが住む星をその手で壊すな 町田勝男

レイチェル・カーソンの「沈黙の春」は約六十年前に書かれ、農薬などの化学物質の使用に警鐘を鳴らしました。この地球温暖化は、人間が便利で快適な暮らしを追求し過ぎたことによるもので、人為的な問題です。この作品は、作者の強い憤りを表したものでしょう。

ひびといふ医学用語はありません骨折ですといはれて帰る 稲田正康

作者は骨にひびが入ったと思って病院で受診したのでしよう。しかし、医学用語で骨折と言われ、治療を受けて帰ったようです。本作品では受診する前の不安な思いから、ともかく診察を終えての作者の落ち着いた思いを感じます。

作品一

桜井 美保子 神奈川

ペランダの半日陰に置く月下美人鉢植ゑの苗ひとつ育てる
風邪に三日臥したるあひだに変化あり大きな葉に茶色の斑点
葉の斑点いつしか乾きその葉から新芽吹き出づ輝く黄みどり
嶋田氏にもらひし月下美人の苗六十センチほどの丈となりたり
表紙絵の月下美人に励まされ月々の仕事熟し来りぬ
九十センチの支柱に丸き輪が三つその中に繁る艶つやの葉は
柱サボテン三日続けて一つづつ大きく開く八月の夜
柱サボテン花の香りはあらずとも手のひらほどの大いなる花

田端 五百子 岩手

亡き夫の香水わづか壘の底シール色褪せ手箱の中に
薄れゆく地縁・血縁夫の忌に集ふうからの数減り寂し
思ひ出の団扇が長押に並びをり走馬灯の如巡る想ひの
流れ出る汗を拭きつつ負ひ来たる真桑瓜ごろり縁にころがす
咲いて散る花火大会終演す火薬の匂ひ闇夜を漂ふ
余震あり速報アラートなる前に犬は階段駆けのぼりくる

朝まだき涼しき風入る網戸越し床に寝ころび鳥の声聴く

野村 灑子 千葉

己を主張するがに髪の毛のいる緑・ピンク・黄それもいいかな
忘れたる干し物とりこむベランダに空見上げれば十六夜の月
球場を整備しホースに水まける広きグラウンド色変はりゆく
今時の男の髪型何かヘン、耳の上迄刈り上げてみて
落葉してそりかへる病葉台風の余波なる風に音たてて飛ぶ
開店前のデパートの店員全員は鏡に向かひ百面相するといふ
いづこにか置き忘れたる家の鍵今日の行動思ひて探す

正田 フミエ☆ 栃木

盆迎えの提灯の傷み烈しくてわれらの代に新調を思う

新調の提灯下げて盆迎え菩提寺に来て灯と帰る

毎年のカボチャの勢い蔓のびて畑から出る家族の懸念

カボチャ蔓の繁茂はばかり家族の為支柱柵作りいそいそ励む

本を見つつ支柱柵作り愉快なりカボチャの蔓を這わせんと思う

思ったよりがちり出来た支柱柵やれば叶うとカボチャ苗に言う

飯塚 澄子 東京

藍色の浴衣の下がる祖母の家祭り近づく八月の迫る

小学の四年の孫の新調か模様も大きく華やぐ一隅

黄色地の兵児帯しめた祭りの夜祖母はスマホで我はカメラに

その昔盆踊りの音流れ来て趣のある夜をば過ごしし

盆踊り二夜過ごした浴衣をば祖母は手洗ひベランダ賑はふ

冷えた梨半分剥いて小切にし曾孫届けくる嫁の計らひ

学ぶこと続ける生を続けたし受講生の残暑見舞に

身延山久遠寺の便り多きかな法主の姿仰げる幸せ

斉藤 トミ子☆ 栃木

風鈴は天明^{てんみょう}鑄物^{いもの}千余年の音色響かす和音となりて

岩煙草唐沢山に見つけたり遠出せずとも会えて仕合せ

午前五時人影のあらずこの朝も熱中症の警戒情報

足利と小山の花火見に行くと受験生の孫小遣いせびる

試着室出でたる迄は我が側に以後記憶なしスマホの行方

スマホ無き数日間を過して不便と思ひ安らぐと思う

脳内に萎縮あるらん忘れ物捜し物多しこの頃の我れ

高橋 耀子☆ 埼玉

籠りいる日々を楽しむ熱気ありオリンピックの観戦声援

再びの学び目指して米国へ敦成がんばれ爺婆待つてる

医院にて心筋梗塞の疑いと待合室で救急車待つ夫

救急車の機器に数字の動く中聞き取り調査とサイレンの音と

手術待つ時間の長さよ時に見るテラスに転がる仰向けの蝉

カナダへの短期留学する真央親付き添いの成田空港

到着を安堵の吐息と共に言う末の子案じる娘は親となり
風の吹くベンチに座り法師蟬のかすかなる声きいている

オリンピックク

浜田 はるみ☆ 埼玉

フェンシング個人団体男子金フランスイタリア抜く驚異なり
偶然に高飛び込みに釘付けで十七歳の玉井陸斗知る

オリンピック開会式はセーヌ川とパリの建物生かした演出

七時間の時差は丁度真夜中でライブでなかなか五輪見られず

全階級女子レスリングは金メダルこんなミラクルあるのだろうか

日本のメダルラッシュにここまでの時間と努力とプレッシャー思う

パリ五輪テロの警戒ありてこそ感動できる晴れ舞台なり

閉会式ライブ見られず再放送待っているのに番組になし

野崎 礼 子☆ 埼玉

白木槿芯まで白く涼しげで可憐な姿に猛暑忘れる

雨が止み露を花びらに滴らせ生き生きと見ゆ木槿の花

垣根越し群れ咲く木槿風に揺れ今年の夏に終わりを告げる

一言で私の気分が変わる夏そうだ今日は私の誕生日

アンケートに年代を書く欄のあり七十代ちよつと複雑

何となく過ぎてゆく日々が幸せと思えることが幸せと思う

モンシロチョウひらひら植木に舞い降りて夏の終わりを告げて行きぬ

今日はずる休みして出かけよう父の一言に救われし我

私の八月

飯嶋 久 子☆ 茨城

夏の空に果てにし向田邦子さん今年は「父の詫び状」を読む

御巢鷹の峰に散りにし九ちゃんのやさしい歌声忘れじ今も

新聞のおくやみ欄に思いがけなし豊田伸一さん温顔浮ぶ

こんなにも早く逝きにし糸賀さん池のほとりに娘さん待つや

百日紅散る花卉を掃きながら焼夷弾の下走りし日思う

甥夫婦大洗の花火に来るといふふるさと納税の見かえりなると

今はもう花火も音のみ聞きており打ち上げ花火ドスンと響く

わが街は港々に花火あり平磯、湊、阿字ヶ浦と

岩 淵 綾 子 岩手

広島の被爆アヲギリ語り部の心の内の深さを知りぬ

樹木医の心がつなぐアヲギリの移植によりて葉が繁りけり

NHKスペシャルを見て特攻の学徒出陣に哀れを見たり

戦後七十九年の様変り老いたるわれは戸惑ふばかり

孫らきて姉妹で作る得意料理サンプルにジャーマンポテト

突然に知人亡くなりショック受く預けたる鍵返しくれしものち

震災前同じ部落の知人にて両親の許へ旅立ちにけり

樗 木 紀 子☆ 東京

晴れ渡る東の空に真つ白の雲の湧きいで美しと見る

我が町の天祖神社四日間祭の続き人で賑わう

神明橋車通行止めにして橋を借り切り人が集る

一日目「ふるさと祭り」模擬店とゲームに町の子供達並ぶ
二日目から子供神輿と大人神輿掛声をかけ巡行したり

田中祐子☆ 埼玉

雷の威嚇は明け方近くまで恐くは無いわと思いつつちぢむ
雷さまが来るから蚊帳へお入りとまことしやかに母の説教
雷さまと蚊帳の巡りは聞かず経ち昭和の昔の風習やもと
昨晚の雨に気温は下がりたり徒歩五分ほどのバス停へ向く
開店は九時の駅前スーパーに老達早も賑わいて楽し
おだいごは好きでは無くて嫌いでも無くちまちま真面目に作る
旨いねの声は子が継ぎ肉じゃがを久びさ作り供えて足る日
添削を賜る美保子先生のコラムと写真丁寧にひらく

倉浪ゆみ 埼玉

アラン・ドロン八十八歳星となる我が青春の燦かな星
新しき車に末の子は「お父さん最後の車かな」とぼそりと言ひて
善光寺さん散歩コースの友がゐる信濃の夏はと問へば「酷暑」と
まなこ閉ぢ降る蟬時雨をきいてゐる終戦記念日妹の生日
オリンピックの熱気もプラスされゐるか暑さ極まる日本列島
どこ迄も蒼く高い夏の空わたがしの様な雲が漂ふ
こんぺい糖散りばめた様に百日紅晩夏の街に散り敷くは淋し

林 美智子☆ 東京

コロナにて八月半分は辛き日々受験生の孫に移さぬように
コロナ明けやれやれと思う真夜中より吐き気腹痛激しく入院
丸三日食べねば吐き気治まりて一週間振りに夏空を見る
久々に眺める畑は草伸びて茄子・ピーマンが埋もれており
九月来て梨来て桃来て葡萄来るもクーラーのある部屋を出られず
風に乗り行く蝶速しこの熱き九月の庭を繰返し飛ぶ

長尾弘子☆ 東京

蟬の声日ごとおおきくなりゆきて白雲流るる空の高まり
銀杏のたわわにつきたる枝々は大きく枝垂る秋の日照りに
照りつける日差しをさけてビル風の吹き過ぐる角にしばし佇む
いくつもの空ある公孫樹鳥たちの住家となりて出入り賑やか
ポツポツと当れる粒は突然に豪雨となりて辺りも見えず

矢野 操☆ 香川

練習し上達しない人を見たことがないとの書家のはげまし
誰からもわが筆蹟へひらがなに特長がある言われ気がつく
「の」の字のリズムつかむまでひたすらにぶつとおし書く八時間ほど
伯母の文具店から墨汁をかうみさちゃん飲んでいるのの声を

松中賀代☆ 高知

山の谷水嵩増して音高く陽割れした田を一気に満たす

辛うじて枯れずにいたか蓮芋にめったに咲かぬ花が咲きたり
午前四時あまおと次第に強くなる新聞は早配られており

「なにくそ」と歯を食いしばる友もいる　ゆるゆる生きる自分を叱る

今日一日皆に良いことあるようにデイの仲間には笑顔送ろう

今年の柿の実一ケも止まらずに落ちてしまいいぬ　ああ次郎柿

賜りし無農薬の米輝きて一粒一粒立ち上がる飯

小流れの冷たい水に糸トンボ涼しげに飛ぶ茅の穂に休み

本郷歌　子☆　栃木

ウォーキング犬の散歩ジョギングと猛暑日の夜の公園は賑わう

又ひとつ仏様増えて仏壇の朝の挨拶少し長引く

痛む腰伸ばし伸ばし栗拾う箆いっぱいの栗の艶やか

バスケットのシーズン開幕胸躍る声援に拍手に力を込めて

我がチーム調子は如何に試合前のシュートの練習じつと見詰める

新加入の若き力に期待する初めての試合にシュートを決めて

勝利して歓喜の声響きわたる今季初めてのバスケの試合

村上美江　岩手

姥百合の名には決して負けず立ち酷暑の庭に白際立たす

爽やかな乙女の如き立ち姿喇叭のやうに横向く姥百合

はつとする真白き姥百合横向きの十七の友かさね懐かし

見も知らぬ方より届く色紙絵に歌集『さみどり』の一首の繋がる

可愛らし淡いピンクの花二つ木槿の先に蕾の六つ

さあ午後の昼寝の時間といふ時に約束無しの訪問チャイム

コロナ禍を心配せぬか訪問の客に「マスクをつけて」と促す

タイミング外され昼寝の楽しみを用なき用に汗かき返す

伊澤直子☆　東京

紅色の百日紅の花あふれ咲き猛暑の庭に眩しく映る

猛暑でも休日どこかに出かけたいと国立近代美術館に行く

若き頃名を覚えたる画家数名作品見れば思い出される

森麻季と錦織健のコンサート豊かな声のホールに溢れる

「この道」や「からたちの花」ポピュラーな歌もしみじみ心に響く

「蝶々夫人」のARIA六曲眼裏に情景写りしつとりと聴く

日没どき淡き夕焼け広がりにて二日の月も染って見える

秋海棠秋を告げる花だそう庭には夏の盛りから咲く

乾義江☆　茨城

めずらしき飛行機の音に思いだす奈良の義姉との韓国の旅

美しい紋様の立羽蝶まといつく美人だった姪の逢いに来たるか

何処にも百日紅の咲き極まれど重々と俯く猛暑のなかに

何時見ても窓閉じたまま世の音を遮る静かな老人施設

ホースにて水撒きすれば揚羽蝶蜻蛉現れ庭飛び回る

床のなか身じろぎもせず聞いているつんざくが如き雷鳴と地響き

真夜の地震5弱の揺れも眠剤に白河夜船子のメールに知る
母上逝去嫁御の胸中思われて気遣いせよと息子と孫に

稲津孝子 福岡

移動遊園地に新幹線とふ乗物のありきドイツの五十年前

含羞草月見草野萱草藪萱草わが夏の庭の一日の花

星と書きあかりと読むとふ女の子声かけくれぬある会合に
稀に庭に出でし夫が庭のもの切りにき通り易くするため

目の覚めて遅き雨戸を閉むる空に細き月あり星したがへて
踏切のフェンスにひとつ雀みて狗尾草の穂つつきてをりぬ

口腔と足のケアぞ年とればと言はれぬき通ふ歯医者と皮膚科

二百七の国の参加のオリンピック如何に思ひてをらむプーチン

戸部田とくえ 福岡

雨の日の安らふ音につつまれて無となり憩ふこだはりすてて

一人住む友に連絡つかぬまま不安つのでりて一日暮れたり

午前六時いつもの道に出会ふ人たがひの志つづけていきたし

草とりを終へて見渡す庭の木々とも暮らし長くしあれ

巢の完成まぢかを見つける庭の木にすずめ蜂の恐怖にすくむ

自宅の庭マムシにかまれて入院と友の電話にをのきやまず

水やりをかかせぬ畑の苦瓜を調理かへつつ今朝はサラダに

塩もみのスイカの皮を刻みつつ母なつかしやけふは月命日

永光徳 子☆ 東京

朝刊を小脇に挟み庭歩く夏の怠りつる草の猛威

植え込みの躑躅を覆うつる草を一本抜けば尻もちをつく

自生するヤブカンゾウとハナニラと野性の花は勢いて咲く

気がつけば生け垣の下に曼珠沙華彼岸も近いと知らせてくれる

今月は十五夜もある庭隅に一株残したススキも穂づく

独り居の特権なりや朝々に時を気にせず自然に浸る

朝七時娘達よりライン来る元氣マークに今日も始まる

大塚照美 兵庫

盆すぎてまだ色褪せぬ鬼灯の数の減りつつ夏をはりゆく

買ふ積もりなくも度たび店に来て陳列のぞく信楽の急須

注文のケーキと珈琲はこぼるる程よき位置に止まるロボット

ポストより取り落としたる郵便物うかつは禁と額を叩く

いち段を上り降りして遊べるも降る時は坐る一歳児の智慧

北国の嫁御の里より届きたる玉蜀黍を配るご近所様に

いつよりか買はずなりたる宝くじ迷はず買へりしやぶしやぶの肉

津田梅子氏北里博士とやうやくにお目もじ叶ふ釣銭もらひて

吉村昌子 千葉

揚羽蝶今日も午前と午後に来て庭をゆるりとめぐりて帰る

雲のうへ久し振りなる雷がかけめぐり行くを窓に見てをり

曾孫連れ娘と孫が午後來ると聞きて急いで掃除してをり
百日草つぎつぎ咲くを仏にと朝一番につみて供える
寝る前に仏の前で今日のこと話してひと日を感じてをり
三十五度越ゆると言へる今日の暑さ道行く人も雀も見えず
玄関の外の温度計三十五度公園の子ら元気に走る

井上 槇子 新潟

あふれゐる土用の風は日を集め熱波となりて顔こがすほど
隣接の長岡市の友充滿に押し寄する煙の有様ききくる
熱中症恐れて部屋に籠りゐてわが市の大火を知らずにをりぬ
音楽を奏でる中に経を読む葬儀の見本の案内書貫ふ
髪黒く染めて和服を着たるとふ外つ国の女ら弔ひに座す
歩きても行ける短き距離なれど炎暑に車で書状を配る
もどり来て呼べば火花に怯えたる猫は蜘蛛の巣纏ひ寄りくる
日の暮れに点る駅舎の電灯に群れ飛ぶ椋鳥は尚も勢ふ

吉田 佐好子☆ 茨城

台風が一つ二つと現れて進路予想細かく確かむ
停電が何より不便オール家電自家発電機の購入急ぐ
大雨で車や家が流された鬼怒川氾濫記憶は鮮明
台風で計画運休する列車娘の合宿ドタキャンとなる
音もなくただ一筋の閃光が天より走る夏の夕暮れ

閃光を見た五秒後に雷鳴を聞いたと同時に生温い雨
いつまでが残暑お見舞い書いてよい？インターネットに今更を聞く
新学期始まる前に学童の通学路整備地域の有志で

鈴木 やよい 東京

部屋にこもり昔のものを片付ける過去を捨て去るこちしながら
「おそしさま」と星みて言ひし子のことは捨てむとしたる走り書きにあり
滑り台の塗替へする人ていねいに塗りては離れ具合確かむ
ブラインドの隙間より見る百日紅まぶしき光に鮮やかさ増す
神経に潜みしウィルス現れてただただ耐へる辛き痛みに
ワクチンの補助申請も済みたれど予約の前に罹りてしまぬ
痛み止めの効かぬ夜中に白湯を飲む朝来るまでの時間の長し
ワクチンをあの時早くしてをればと仕方なきことくよくよ思ふ

山本 三男☆ 群馬

本を読む二階の部屋に下に居る妻の料理の音の聞こえ来
久々に散歩をすれば疲れたり猛暑の日々を籠りいたりて
ハガキ持ち郵便局まで歩む路民家の庭に朝顔の咲く
以前には出来た高所の電球の交換を今は職人たのむ
週二度のゴミ出しの日のすぐに来て後期高齢者にわれはなりたり
職探す苦しき夢をみていたり目覚めたる床に現実のわれ
スーパ一の売り場に米の無きことを帰る車内に妻は言いたり

猛暑日は九月になれどまだ続きテレビは相撲を映していたり

中村 哲也 宮城

花輪線運行確かめやうやうと盛岡に着けば運休なりぬ(八月十三日)

岩手県襲ふ午前の大雨に川水増して運休なりと

花輪線改札口の掲示板運休の字に人等佇む

花輪線動かず急きよ大館に行くバスに乗り故郷に向かふ

通常は満席なれるバスの中相席も無くしんと静まる

この冬を越せるや否やすつかりと老いを感じる親見て思ふ

出掛けるに着替へのさなか窓の外聞こえる雨音急に強まる

玄関に靴履きをれば雨音に急に轟く雷鳴一つ

外塚 喬歌集

『不変』を読む

大山敏夫

「不変」だった。

歌うことがたくさんあったのかと思うが、特に嘆いたり誇張するでなく、飾らぬ日常語で普通に歌うのが余計に読者の心をうつ。

どちらかがあなくなる日の頭にはなくて

いつものやうに散歩す
鳥を見に行かうと言へば鳥よりもうれし
さうな声それ待つてみた

ご妻女とは毎年旅行を共にしていたが、この年だけは叶わなかった。しかしこの歌のように、散歩もちよつとした外出も常に一緒にある。頭はないと言うのは逆にそれだけ重い

ことなのだ。

何が幸か何が不幸か死ぬまぎは言へさうなれば言つて死にたい

よろこびのこゑをあぐるは人のみにあら

ず木立の高空に鳴る

本音の見える、真実の見える歌である。

マゼンタの補充をすればプリントをさ

たる顔の笑顔となりぬ

こんな軽いタッチのものも印象的だ。そして、次の一首は、筆者の身にも沁み渡つた。

七十代後半は勝負の年齢ならず暇明きを埋めて遊ぶにかぎる

(いりの舎刊)

「朔日」主宰、外塚喬氏の第14歌集。二〇二〇年の一年間に詠まれた未発表作品六二八首を収録。この一年間は著者にとって特別な日々であったようである。コロナ禍によるステイホームがもたらした拘束感もあるが、ご妻女の二度にわたる入院治療の影響や、著者自身の大腸癌手術もあったりで、互いに労り合う「老老介護」の状態であったとも言える。そんな中でふつと思いついたのが歌集名

■島木赤彦の一首鑑賞 7

薪くべて火をふくおのが臂に涙流るる拭けども
拭けども

島木赤彦 『切火』

この歌には暗闇の中、背を丸め風呂を焚く赤彦の顔がオレンジに照らされる様子が浮かぶ。炎の熱にも乾かぬ涙。一体何があったのだろう。拭けども拭けども流れる涙。

人間の一生には、「どうにも出来ないこと」「どうしようもないこと」「運命」の様な悲痛に甞まれる時がある。この歌が赤彦のその時の事実とするならば薪の火をふく動作により悲しみの感情が同じリズムとなり心から溢れてきたのであるうか。息は強より弱になり、やがては息を吹けなくなる程増す悲しみ、苦しみ、悔しさ、残念さなど、涙でしか表現できない人の弱さも見えるようです。拭けども拭けどもの繰り返しには、吹けども吹けども聞こえ、その息も「吹く」でなく「ふく」のです。

冬雷の「島木赤彦文学賞」の初の結社受賞があり、私はそれまで全く知らずにいて、短歌に一生を掛けた偉大な作家、島木赤彦の歌に触れることができました。とても勉強になりました。ありがとうございます。いつか機会がありましたら長野県の諏訪を訪れて見たいものです。 <村上美江>

島木赤彦研究会 人会案内

- 島木赤彦研究会は昭和45年に設立。支部は昭和49年に長野県支部として設立。
- 会長 高橋 克
- 島木赤彦研究会は、近代日本文学および、近代教育における島木赤彦の業績の資料保全と、調査研究を目的としています。
- そのための研究活動として、研究大会の開催・資料展示会・東京例会・支部研究会などを行っています。
- 投稿などの機会が得られます。● (年会費)二五〇〇円
- 本部事務局 江戸川大学 高橋 克 研究室内
- 〒270-0198 千葉県流山市駒木四七四
- ☎ 〇四(七一五二)〇六六一(代表)



九月号作品一評

小林 芳枝

二十分の面会時間またたくま手を振り
続く施設のあねは 正田フミエ☆
コロナ感染は未だ収まらず面会は厳しく制限されている。やっと会えた時間は直ぐに過ぎてしまい、ずっと手を振り続けている姉の思いが切ない。

二〇二三年合同歌集送り来る片手に持てぬ厚さ二センチ 飯塚澄子

今回の作品年鑑は今までより厚くなり重さもゆうメールの基準を越えてしまっただけれど喜んで頂けたようで嬉しい。

草むらを出でて畦道這いまわる夜を樂しむ主をみたい 高橋燿子☆

暑さを避けて早朝に畑の手入れをする作者、葉の上に光る筋を見つけた。何かが這った跡なのだろうがその空想が謎めいていて楽しくなってくる。

雨の中野菜の虫を捕る作業一度休めば倍にひろがる 松中賀代☆

自分で育てた野菜を直ぐに食べる喜び

にはこうした苦勞が必要になる。夏の畑には草が生えるし虫が増える。地道な努力があつてこそ美味しい野菜が食べられるということが良く理解できる。

此の冬に切り倒したる泰山木鳩は好みて巢作りをしき 永光徳子☆

大きくなりすぎて切ってしまった庭の泰山木は鳩の子育ての場所でもあつた。困っていないだろうか、何処かで巢作りが出来たのだろうか、と心配になる。

ブレーキを踏むことできぬ夢覚めつ免許返上せむとぞ思ふ 稲津孝子

足が弱くなる年齢だからこそ車は必要なのに危険度も大きくなってくる、そんな心の不安が夢に現れて漸く決心した。暫くは不便を感じることもあるだろう。

完治なき緑内障ゆゑ程ほどにと再びはじむる「大人のぬり絵」 大塚照美

目を休ませようと止めていた楽しみだったが期限の無い我慢に堪えられなくなつてしまった。害にならない程度にという時間を守るかどうか、心配だけけれど目を大切にしてほしいと願う。

孟蘭盆に孫らも手だすけするといふ確約はわれの支へになりつ 井上楨子

住職である夫が病に倒れて心細いときに孫まで協力してくれるという。「確約」は少し言葉が固いようだけれど力を合せて切り抜けようとする孫たちの意志の現れのようにもあり、作者の安堵のようにも感じられる。

光る君のドラマ始まり原作の現代語訳を読み返してみる 吉田佐好子☆

NHKの大河ドラマを見て源氏物語を読み返したという熱意に敬服。

さすがプロと言ひて夫は農家より野菜買ひくる畑の帰りに 鈴木やよい

自宅で食べる野菜などは作っているのだからが偶々買った農家さんの野菜に感動する。初句に人柄の良さが現れていてリズムも快く響く。

どのように妻に言おうか迷いおり病院帰りの車の中で 山本三男☆

難しい病名を告げられたのだろうか。自分のことより妻を思う気持が優しく感じられる。

九月号作品一評

藤田 夏見

巻き癖も取れて暦は折り返し蝶先立てて茅の輪をくぐる 田端五百子

六月の晦日、夏越の祓えに蝶々の先導で茅の輪をくぐった作者。暦の半分は切り取られ残りの日々を息災を乞い願う。

這いあとの曲線朝日にきらめいて草むらに住む虫を知りたし 高橋燿子☆

早朝の散歩で見つけた朝日にきらめく這い跡に好奇心を抱かれた。アニメなどで可愛く描かれる場合もあるがその正体はナメクジ、あるいはカタツムリ。

布以外切つてはダメと裁ち鉄今では堅い牛乳パック切る 浜田はるみ☆

今は家族の衣類を布から作ることは稀になり、年頃の子に高価な裁ち鉄を買い与えることは稀だろう。大切に使用してきた作者の裁ち鉄は今も万能なのだ。

夕暮れに早く仕舞えと畦に立ち明日明日と言う夫だった 松中賀代☆

働き者の農家の主婦であつた作者。野

良で日暮を迎える事もあつたのだろう。

ご夫君はそんな妻に畦から終了の声をかけた。夫を昔を懐かしみ詠まれた。

ざりがにを釣りし小川の既になく荒草茂る排水路となる 本郷歌子☆

水草がそよぎ小魚や虫なども住む清流でありし日の小川を懐かしむ歌。ザリガニは土に潜り冬眠する。現在は三面をコンクリートに塗り固められた側溝となり住宅街の排水路としての機能。

直近のこと忘れつつタイマーに頼る三分五分十分 稲津孝子

物忘れの増えてきた自覚に、自身の日常のルーティンをこなす為の工夫をされている。結句の三分五分十分に現実。

山椒の実とりつつ誠うれしきの募り作らむちりめん買ひて 戸部田とくえ

山椒の実を指でもいで採られている時香りも立つてくるようだ。ちりめん山椒を作る喜びに心が踊っている作者。どんな顔を思いながらでしょうか。

何となく晴ればれせぬ日の続きみてこの夜は早めのひとり焼肉 大塚照美

いいですね。自分の機嫌は自分で取ることが一番です。ゆったりと美味しいお肉を食べて元氣を取り戻された。明日からの活力となった事でしょう。

病院の夫に付き添ふ待合室にわが休養のごとく眠る 井上楨子

多忙な日常を送られる中で御夫君の通院にも付き添われている。病院の待ち時間は結構長い。座った時つい微睡まれた。傍の方は静かに見守られたのだろう。「休養のごとく眠る」ほどに疲れている。

言ひたること後で悔やめど仕方がない冷蔵庫には葛餅がある 鈴木やよい

誰にもある事です。後悔は苦々しく何度も蘇るのです。仕方がない事です。ちょうど冷蔵庫にある葛餅の優しい美味しさに慰められてください。

やや遠き道の駅まで車で来ソフトクリームを妻と食べおり 山本三男☆

何かがありどうしようかと思う時、身近な人と味わうスイーツは心が少し休まるものです。少し遠い道の駅へ来て妻と食べたソフトクリームの歌。

十一月集

小林貞子 山形

平底の小瓶押しゆく植穴に二粒づつ蒔く大根の種
げんこつで畦を窪ませ種蒔きし母のもんべの姿懐かし
忠実な整枝と葉摘み施せば時を長くに胡瓜生りたり
定植の白菜苗に近寄りて紋白蝶が早ラブコール
あきづ来よなほしてんたう現れよおほたうらうも畑に集合
セルトレーへ一粒一粒置く種に春玉葱の夢を託せり
米騒動稲穂の実り前にして米が買へぬと孫が言ひをり
取り置きを玄米を搗き好物も詰め込み北の地へ送りやる
濃淡の花色深きこすすの花の手触り天鷲絨に似て

東 ミチ 青森

食べ残しの百合の球根庭に植えて咲けば馴染みの深き鬼百合
長生きの時代の波にゆれながら身体の故障と必至に戦ふ
膝痛を克服せねばと手当りしだいにサプリメントとネバネバ野菜
アボカドを一日半個五グラムが膝によい数値と四十五個をすでに食みたり
プリテオグリカン・さめ軟骨・コンドロイチン・グルコサミンどれか効かむ

新札が難無く揃ふ銀行もスーパーも人の手介さず機械から
風鈴に下げる短冊を書き替へる今の心情「歩々是感謝」と
コホロギの鳴く一節ひとふしの正確さしばらく聴きゐる一人のしじまに

佐藤幸子 山形

台風五号が東北目指して来るらしくどうかこないでと祈るしかない
秋採りの人參の種が二袋机上に残る長雨で蒔けず
山畑の草刈る夫のうしろ舞ふハグロトンボがひらひら四つ
慶応とどうにか読める朱の文字の位牌と会話す今日は盆入り
久しぶりに会へた心地に知る人の墓碑巡りゐる盆の墓参り
子を送り孫も見送り残りゐる息子も帰り長き盆終ふ
湯上りに窓辺に寄れば虫たちの声の賑はふ夜の涼気に
三番蒔きの胡瓜の収穫バケツ二つ両手にずつしり八キロはある
産直のチルドコーナーの「ぱりぱり爽やか胡瓜」はレジ通るたびわがメール鳴る

山本述子 神奈川

澄む空に白雲むつくりをちこちに暑き中にも秋の気配す
生協に米の注文なしたれど抽選漏れで急遽素麺
白米無く餅米求め小豆煮て行事なけれど赤飯を蒸す
コーラスで心を籠めて歌ひ上げ拍手浴ぶれば照れつつ安堵す
バラ選手次メダル獲得す大きな拍手惜しまず送る
飼兔の昼寝の場所はクーラーの下ぐつと伸びして半日休む

瀬音たてほとばしる流れ写したる暑中見舞をラインに貰う
涼しさは目から耳からたちまちにラインの動画繰り返し見る
雨降らず日照り続けば露草は葉を巻き縮んで色の褪せゆく
ざわざわと夏草騒がせ吹く風は汗びっしょりの我の背にも
おりふしに樹木を揺らす飛び切りの風が吹き来る其を待ちおり
猛暑にも色濃きゴーヤ生子継いでその勢いに救われている
生命力強きゴーヤのジュース飲む九月に入りても炎暑は続く
燃え盛る炎の側を歩くごと国道沿いの歩道を駅まで

児 玉 孝 子☆ 愛知

日の経てば二足歩行も常となり盆を迎うに庭草をとる
全力で回るスタンド式扇風機故障なく親し五十年となる
格別に世話になったと丑の日にうな井奢り揃う夕食
咽頭癌の術後の甥を案じつつ居ればおどろく暑き日に来る
声帯なき身となる甥はタブレットに笑みて伝える心配するなど
咽頭に物を通すは難しく食事に九十分掛かると言いぬ
仰向けの蝉の最期か玄関前にまだ命あり木蔭に移す

ともしび

松 本 英 夫 東京

サンタさんほしいおもちやがなぜわかる五歳の息子の面持ちなつかし
値引きしてわが社のテレビ買はれたりぐつところへし一日店員

愁さそふダーク・ダックスの「ともしび」に光もとめし日日よみがへる
二年ぶり来れば院長逝去とぞ門に生ひたるさるすべり赤し
来年は展示に来ぬと友言へり会ふは最後と告ぐるごとく
九十に近き人らのさりげなく辛さをしのぐことを知らざりき
とりあへず百まで生きると決めにけり学び進めんゆらりゆるりと
いただきし赤き歌集を見つめをり『コロニーの森』は「凝視」の水谷氏

藤 田 夏 見☆ 広島

透き通る海思い来ぬゴーグルに小魚を追う土佐柏島
ゴーグルの先をクマノミ通り行く枯れたる珊瑚の白の無機質
青空とエメラルドグリーンの舞台なり船より飛べる孫の雄叫び
波をわけ船底くぐりあらわれる親子のイルカは船のあとさき
橋の下の湾に浸かりて孫どちとソラズメダイを声あげて追う
夕暮れて湾に泳げる人もなし黒潮の海の波音響く
沢蟹の這うコンビニの駐車場土佐街道の山路に入りて
波音を聞くかと覚ゆわが家に風の揺さぶる篋の音

三 好 規 子 神奈川

八箇月ぶりバスに乗り銀行へ解約に行く付き添ひなしに
タブレットに解約の署名し印鑑もタブレットに押す朱肉は要らず
夏休み女孫は琵琶湖畔にて二週間すす車の免許合宿
夏休み男孫は長野に三泊のアーチェリー合宿の後イギリスへ発つ

二週間を英国バンガー大学の語学研修に行く高二の孫は
腹を見せ転がる蟬の道に増え秋立つとふ日の朝より暑し
諦めずに声を掛け合ひ演技つなぎ金メダル受く体操男子チーム

益坂順子 福岡

蝦夷富士といはるる羊蹄山に発つ心浮き立つまつさをの空
視界なき登山の道は標識を辿ることのみ黙をとほして
差し掛かるガレ場に花の咲き盛りちからを貫ふ竜胆の青
頂に笑顔の並ぶ岩の間を縞栗鼠ひよつこり皆の歓声
脚力は十一時間に耐へたるか登山終へたり笑顔残りて
ゆつたりと浸る習慣なきゆゑにまつかり温泉この日もしかり

「玄海」の赤き暖簾に導かれ千歳の街の夜を楽しむ

早朝の千歳神社の境内に笑みこぼれたる蝦夷栗鼠二匹

北海道の旅のひと日にラベンダーの丘に憩ひて香に浸りたり

吉岡松世 愛知

野田山の草いきれ匂ふ草はらで友と寝ころび語りし日ありき

「睦月には富山でも揺れ激しかりき」と同窓会の案内にあり

山中町のおびただしいほどのセミの声父を見舞し小二の夏よ

漸くに七月初旬聞こえくる励ますやうな蟬の初鳴き

夏休みさいごの日にはただならぬ台風の雨に怯えふるへて

秋茜飛びし空地に家が建ち我家の庭に迷ひ込み来る

九月集／残響集評

大山 敏夫

警報級大雨とふ日もデイサービスの迎
への車は老いを乗せゆく 梶尾栄子
上の句の特別な状況の下でも、下の句
のように、高齢者介護・サービスク連の
車は活発に走り回っている。現代社会の
一齣を捉えている。

梅雨晴れ間膝が泣くほど正座してアイ
ロンかけるシャツ十三枚 石渡静夫☆
少林寺拳法に鍛えぬかれた作者の膝に
来るほどの長い正座というのはどれ程
か。それに堪えつつきつちりとアイロン
掛けを行う姿に、思わず襟をただした。
結句の具体的な数字が生きている。

渦巻の形残して燃え尽きぬ草引くわれ
を守りたるものは 佐藤幸子
照りつける日のもとに草を引く作業は
辛いものだが、強い味方がこの渦巻の形
を持つ物なのだ。言うまでもなく「蚊取
り線香」だろうが、それを婉曲に表現し
て奥ゆかしい。

振花は日差しのなかより摘み取られ蛍

光灯の下のピンに立つ 藤田英輔☆

振花を摘んだのが作者ではないことが
読み取れる。下の句からは夜ではないだ
ろうが室内であることが分かる。でも、
どこのどういう場所の蛍光灯の下なのか
はぼやかされている。「ピン」の表記も、
もしかしたら「花瓶」ではないのかもしれ
ない、なんて想像させる、不思議な歌。

犬連れて川沿ひに見し蝮草あの草むら
に今も潜むか 須藤紀子

作者のご自宅近くは里山なので蝮草も
顔を出すのであろう。蝮が鎌首を上げた
形に似た草花なので、どきんとするが、
蝮だって居そうだねってという思いが「潜
むか」に込められている。

圧巻の合同歌集手に届き編集の汗いか
ばかりかと 小嶋知葉☆

有難う御座います。お陰様で刊行に漕
ぎ着けたこと感謝です。七冊も作ったの
で慣れたところもあり楽でした。但し冷
や汗は幾度かかきました。

亡き母の麦わら帽子この夏は日傘のや

うにわれ被りをり 松崎みき子

眩くように歌った小品だが、味わい深
いものがある。帽子ならば両手も空き何
かと便利で、有り難みもますだろう。

給食で鯨を食べていたころはこれが文
化とわかっておらず 片桐美穂子☆

作者よりは一回以上前に給食で鯨を
食べていた筆者だが、文化だなんていう
高尚な意識はゼロで、たぶん安いから出
るのだろうって考えていた。最近お店で
出るあの美しいピンクがかった鯨肉では
なかったが。久々に給食の時間を思い出
した。

花形の白い日傘の可愛くて鏡の前で閉
じては開く 金子八重子☆

ふと少女時代に戻った気分で見えの前
で戯れる仕草は「可愛い」。女性ならこ
んなこともあるうって思う。男性用日傘
では間違ってもこの状況にならない。

知人から友になりつつある人の思われぬ
訃報に呆然とする 首藤文江☆

上の句に工夫がある。但し、下の句の
事実に「思われぬ」は不要かもしれない。

残響集

松崎 みき子 岩手

ほとほと暑さに疲れ手ぬぐひで首元を拭くいつまでの夏
畝を立て大根の種を蒔いて見るこじれもせず芽の出る嬉しさ
背丈ほど伸びたる草の名も知らず獣が来さうと夫刈りたり
盆月に普段逢へない親戚とゆつくり茶を飲み昔を語る
流行の洋服着たいと思ふけど街のデパートへ峠越えとなる
庶民の味さんま船待つ秋となり大船渡市場にカモメも並ぶ

高藤 朱美☆ 茨城

暑き日は白き花々涼やかなり初雪草咲く買ひ物の道
異次元に身体動かすブレイキン同じ体かと吾が手足見る
会場に流るる君が代胸深し努力の二文字理して尊し
突然の吉報に吾ときめきぬいい夫婦の日孫入籍と
台風の子報に危惧し二泊を女孫と過ごして旅談義する
稲妻と花火が競う稲敷市の空に飛行機よぎり行きたり
黄のバラに包まれ笑顔の先輩との永遠の別れは信じがたきよ
励ましの言葉いっぱい届きたる先輩とのライン永久保存す

羽田 孝輝 山形

雨の中道路を渡る雨蛙その数数多ブレーキを踏む
親にしか読めぬ名前が多すぎて乱るる漢字の憂ひ尽きなし
炎天下道路を渡る青大将車を停めて無事を見守る
息できず意識朦朧眼も見えずオホスズメバチの毒が巡りぬ
朝夕の涼しさ増して日中の残る暑さが堪へる九月
縁側で帰りを待ちたる猫たちは玄関に来て並び出迎ふ
炎天下に五時間干してふかふかの暑さの残る布団に横たふ
このズボン丈詰めいらすと手に取れば七分丈だと妻横で言ふ

片桐 美穂子☆ 神奈川

持ち歩く木陰といわれる日傘さし裏地に触れば熱さ感じる
結婚のあいさつハガキに佐渡の海SDPをしている二人の笑顔
金網の向こうに見える根府川の海に真白き漁船が走る
桜川沿いに並んだ文学碑三島の情景切り取っており
暑さから逃れた白滝公園で水の音聞き涼気を浴びる
交通系ICカードをチャージする旧札のみでおつりが戻る

猿渡 憲子☆ 長崎

投稿を休みし月も届きたる冬雷誌にごめんと詫びる
街路樹の繁る道路を走るバス窓のガラスに落葉張り付けて
炎天下南京ハゼはスーッと立ち暑氣払う如く葉を揺らしおり
早朝のブルーピンクの空広く白き月のみポツンと光る

九月号作品二評

井上 萱子

草刈機止めて山畑静まれば去れと言ふがに老鶯のケキヨ 小林貞子
草刈機の轟音の止んだ静けさ、そこに一声鳴いたケキヨを去れと聞いた。山の畑は野鳥や獣の領域と知つての去れである。老鶯は鳥の代表で鳴いたのだろう。波静か白きタンカーすべりを湾入口の浦賀水道 山本述子
波静か、白きタンカーそれだけで一枚の絵になる。「すべりをり」に、波の静かな光景が捉えられ美しい写生歌。

これからも毎日茄子が生るのかとぎるもちながら嬉しくなった 早乙女イチ☆
口語力の強さで素直に詠まれると、読者も嬉しくなってしまう。今年は茄子の生りが良いようで、毎日挽げるだろう。一生に自分の知ること限りあり他人の知識は計り知れねど 卯嶋貴子☆
上の句にはなるほどとわが身に重ね共感する。謙遜した下の句だが、ここにも

納得させられるものがある。

山法師は滝のように枝垂れ咲く主不在の草叢の庭 加藤富子☆
山法師の白い花に見えるのが実は苞である。葉の上に一斉に咲き、枝の先まで咲き満つれば滝さながらの盛りの様子。風なくも沙羅の花一つゆらゆらと一匹の蜂が蜜吸い揺らす 川俣美治子☆
蜂が一心に蜜を吸うと、沙羅の花も揺れるのだ。微妙な動きを細やかに観察してできた歌。沙羅と蜂、自然の組合せが一つの場面を美しく描き出す。

ああ、やはりソメイヨシノは飛花落花しだれのそよぐ弘前公園 松本英夫
「津軽」の一連で、東京から北上するに従つて見頃の桜に期待を大きくしていた歌が並ぶ。「ああ、やはり」には、想像はしていたが落胆の気が込もる。居酒屋の連なる横浜野毛の街静まる午後の細道歩く 大野 茜
夜賑わう街を昼に歩くと、妙に空々しく深閑としている。「横浜野毛の街」と固有名詞を入れて、この歌はなおさら、

夜と昼の差が訴えられている。

指示通りタブレットの画面をタップして三角くじの当たりの決まる 松居光子
箱に手を入れてかき混ぜ三角の紙を選べし籤のなつかし 同
二首とも同じ作者である。三角くじの時代の変遷を詠んでおもしろい。タブレットの画面で当たったくじはうれしかっただろうか。くじには夢があったのだが。体育会「頑張つてたね」とメッセージ送れば孫から「ペコリ」の絵文字 西村邦子
孫が可愛いとは言っていないが、よそから見ても可愛い「ペコリ」である。絵文字の効果大きい。

転院先の入院手続き虚しかり事務的対応の書類の数多 野口秀子
家族は患者共々心が弱っているのに、重さに付加をかける事務的対応は痛い。ひとり生えのトマトが日々色付きつ ひとり生えは植えた覚えがないのに、だるう。赤く熟れるのが尚更たのしみ。

九月号作品一評

江波戸愛子

こんなにも多かつたのか休耕田庄内平野の早苗田育つ 本間志津子
後継者不足などで休耕田が増えているらしい、それを知った驚きと作者の家の近くののだろうか、米どころの庄内平野に早苗田の育っている安堵感が伝わる。再びの福知山行く顔ぶれと季節かはりて感動新た 益坂順子
以前登ったことのある山に違う同行者と違う季節に行くことを感動新たと詠んで喜びが伝わる。季節によって山はその姿を変えるのだろうか。

各農家自慢の西瓜並べをり微妙に違ふ 甘さ楽しむ 山本述子
道の駅のようなところだろうか、作者の住む神奈川県には、三浦市のブランド化されている西瓜があるという、下の句はその西瓜なのだろう、農家自慢の西瓜を食べ比べている作者の笑顔がうかび、好みの味があったのだろうか気になる。

猫の世話こまごまとしてそのうへに鳴けばしばらくそばに居るのみ 佐藤靖子

猫の甘えた声とその猫によりそう作者の姿がみえるようだ。昔むかしに一緒に暮らしていた猫の温かさを想い出した。波を読みサポートする手の押しくれるボードの走る岸まで走る 藤田夏見☆
他の歌にお孫さんたちとサーフィンをしに海へいくと詠んだ歌がある。下の句にボードにつかまり波に乗って岸まではしるとあり、その姿を想像して読む側も楽しくなり、うらやましくもなる。

生き生きと葉のびてきた茗荷苗さがして見れば茗荷が一つ 早乙女イチ☆
ご自分が植えた茗荷ののびた葉を生きて詠んで読む側もその葉のいきおいを想像して嬉しくなる。そしてその葉の下に茗荷を見つけたときの喜びが伝わる。道端に播かれたでもなくポピー咲く外来種にて強い花 植松千恵子
道端で見かける外来種のオレンジ色のポピーに似た花には、特定外来種のナガ

ミヒナゲシという毒性のあるものもあるらしい、筆者の住む市では駆除をするように言われている。

天候の不順さ故にさくらんぼ高価となりても友より届く 加藤富子☆
さくらんぼを市場に出荷している友なのだろうか、どんな時でも届けてくれる友への感謝の気持ちを詠む。
ショッピングセンター賑はひ駅前にはシヤッター並ぶ鷹の巣の町 松本英夫
最近はこの様な町が多いのではないだろうか筆者の住む町の商店街もシヤッターをおろした店が多い。

箱に手を入れてかき混ぜ三角の紙を選べし籤のなつかし 松居光子
町会の盆踊りのときにこの歌の籤と同じ籤を作ったが、懐かしいと皆さんに喜んでいただいた。
年どしに作りくれたる化粧水夫は花咲くドクダミ摘みて 西村邦子
ドクダミの花の化粧水は肌にとても良いらしい、その化粧水を年どしに作ってくれた夫を恋う歌とおもう。

九月号作品三評

桜井美保子

希みぬし雨しげく降り庭に咲き生き還るバラを卓に持ちくる 水澤タカ子
待ち望んだ雨がようやく降り出した。本降りの雨の中、庭に出るとバラも生き生きとしている。植物達も雨を待っていたのだろう。小さな喜びが丁寧に詠まれている。

病室の窓より夫は吾を見て小さく手を振り笑顔くれたり 津田美知子
入院中の夫を見舞って帰る折、夫が病室から笑顔で手を振っているのに気づいた。その笑顔は、さまざまな不安を吹き飛ばす。夫婦の愛情の深さが伝わる歌。

しつとりと重たきに謝す冬雷の合同歌 奥山清子
集はわが宝物
『作品年鑑・合同歌集』を手にした時の感慨。ソフトな手触りの表紙で今回も分厚く立派な出来上がりだった。参加者全員の一年間の作品が掲載されている。宝物と想っていただけることは制作に関

わった側としても嬉しい言葉である。

法要あと家のめぐりを姉と歩くつくづく思ふ兄の花好き 井上鈴子

亡き兄を偲びつつ、その家の周りを姉妹で歩く。故人が好んだ植物が多く見られたのかもしれない。普段から花が特に好きな人だったのだろう。しみじみとした下句が心に響く。

晴ればれと飛行機は行く八千メートル上空を雨雲くぐりて 谷田律子
念願が叶って実現した旅。「晴ればれと」は作者の心情。旅の始まりのわくわくした心が感じられる。読者も雲の上を飛んでいるような爽快な気分である。

水無月に入り漸く補聴器届きたり陽射しまぶしき梅雨晴れの朝 塚本節子
補聴器の仕上がり待ち侘びていた様子が出てくる。なんでもない時でも梅雨の晴れ間は気持がいいが、補聴器が届いて格別に嬉しい日となった。

元号が三つ変わった世の中を夢中で生きて半寿の祝い 山崎 猛
「半」の字を分解すると「八十一」に

なるから半寿は八十一歳の祝いであるそうだ。昭和、平成、令和と懸命に生きて半寿を迎えた作者。「夢中で生きて」に思いが籠った。歌にも勢いがある。

土起すトラクターの後追いて鶴の群れは虫を啄む 越澤太郎
トラクターでの農作業の一齣。情景がよく見えて微笑ましさも感じられる。耕された瞬間の土に寄ってくる鶴達。鳥の素早い行動にも驚かされるし、作者の眼差しの温かさも感じられる。

梅雨寒に「奥の細道」のテープ聞き東北の旅に思いを馳せる 後藤恭介
「奥の細道」をテーマとした旅行に出かける人も多いようだ。まずはテープを聞くことで学ぶ作者。旅が実現すれば、また歌が生まれることだろう。

ふるさとの宅地農地を相続し行き来もなまず十年余り過ぐ 岩村知康
土地を相続してもそこで住むというわけにはいかない状況があるのだろう。久しぶりに故郷の島を訪ねた一連にある一首。様々な思いが交錯している。

九月号作品三評

橘 美千代

東洋の片すみにおいて間の抜けた老いを生きる身何を為すべき 新井光雄
ロシアによるウクライナ侵攻（ロシアによる一方的な）、イスラエルとパレスチナの紛争、中国の台湾侵攻への脅威等々、現在世界に芽生えた紛争の渦が拡大しそうな気配。平和な日本に居て作者は決して安穏と生きているのではない。謙遜されているが戦争を防ぐために市民として何を為すべきか真剣に模索しておられる。

独り居の昼餉の皿に柚子大根残りゐて蛇口の水が流しぬ 小田原禮子
ひと手間かけて作った柚子大根を共に味わってくれる人はいない。自分のためだけに作り残ったそれを蛇口の水が流し去る。独り居の侘しさをさりげない日常の風景ににじませて。うまい作者だ。

退院の早まるを聞き帰る道往路より距離の短く感ず 津田美知子
夫君の入院先の病院まで高速道路を通

り往復百キロを走るといふ。慣れぬ道なればどれほど心細かっただろう。良い知らせを聞き、帰り道は心弾んで長い道のりも短く感じられたと。良く分かる。

朝日五時に東の空あかく染め書院の窓の松を照らしぬ 奥山清子
まるで絵画のような風景である。朝五時に東雲の空のもと日がのぼり、庭の松を照らし出すのを、作者は家の中から書院の窓ごしに眺める。こんな美しい光景に始まる一日は心豊かに過ごせそうだ。

パソコンの二十五年のデータを瞬時に失い後悔のわれ 山崎 猛
筆者にも経験がある。子と猫の写真データと短歌を始めた頃からの歌原稿等一切を失った。バックアップを怠っていたところ、たった一度のミスで。悔やむことしきりであった。二十五年分とは相当の痛手であったことと推察される。

赤とんぼ群れ来る畑に手を休め友と眺める梅雨の晴れ間に 越澤太郎
農業を営む作者は、梅雨の晴れ間にしばし仕事の手を休め、友人と赤とんぼを

眺めている。長閑な田園風景が目には浮かぶ。自然を相手の農作業は決して楽ではないと思うが、苦勞を微塵も感じさせず、心の豊かさが伝わってくる。

習うより慣れが大事とはげむ夏月一回の料理教室 後藤恭介
自分や家族の食事を作ることができるのは、生存のため大切なスキルであろう。食材にあった献立、味付け、献立の組み合わせを選択できれば尚のこと。料理が苦手であった筆者も必要に迫られて何とか作られるようになった。始めは手順が悪く時間がかかり苦痛であったが次第に慣れた。本当に慣れである。私見だが、料理ができる男性は最強だと思う。

天さがる故郷の島にわが向かふ遠き海路の波おだやけし 岩村知康
平戸島の南の崎を遠く見てわが乗る船は北西に行く 同
声調おおらかにゆったりと歌われている印象深い。枕詞「天さがる」に導かれる「鄙」＝「故郷」なのであろう。海路を越えて故郷に向かう歓びが深く胸をうつ。

越えて故郷に向かう歓びが深く胸をうつ。

作品二

八十歳に

小林 芳枝 東京

吾が生れし昭和十九年特攻隊に志願する青年をテレビは映す
 敗戦を悟られぬ為の作戦だつたといふ解説にころをののく
 敗戦の一年まへの夏の日に吾れを生みにき小柄な母は
 吾れを抱き母が幾度も入りしとふ防空壕の在り処は知らず
 海軍兵となりたる父の写真ありきセーラー服で髪は黒々
 終戦が三日遅ければ出航する筈だつた父の乗りみたる船
 戦争を語らず逝きし父も母も捕虜となりシベリアより帰りし叔父も

本間 志津子 山形

峯雲の湧き立つ空の片隅にうろこ雲淡くかかる夏の日
 薄の穂ねこじやらしの穂咲き乱れ野辺に日暮れの少し早まる
 ねこじやらしの穂に擬体する毛虫みてその後どの穂も毛虫に見ゆる
 夜の更けを遠慮がちなる虫の声じじと一声八月の尽
 パリ五輪の二週間後にパラリンピックパリ大会の開催となる
 競泳に陸上男子に女子バスケット見てみて清しパラリンピック
 南海を台風十号さまよひて行きつ戻りつ豪雨もたらす

台風のさまよふことも温暖化の故とし聞けば心の痛む

梶尾 栄子 兵庫

朝の戸を繰れば忽ち降り来たる庭の高枝の蟬しぐれはも
 連休に一人居てさびしそれぞれに家庭のあると思ひをりても
 右利きの右手の指の節高くわが来し方を物語りある
 ALSと静かに告げて教育長はこれより短歌習はむと言はる
 雨降りの今日は気の急く用も無く友の電話の長きにつき合ふ
 「幸福のにはひだね」とテオ言ひぬつましき妻のじゃが芋料理に（ゴッホの弟
 前回のブラックマンデー経たる身の株価は戻ると静観しある
 付き人は二本の団扇にあふぎある出番待ちある横綱の背を

植松 千恵子 静岡

年ごとに大きなトマト食べたくて挑戦するが栽培難し
 五年日記の二年目になる雑な字なれど去年を読めばあれこれ楽し
 「元氣です」危険な暑さに参りさう「か？」をつけ足しスマホ打ち直す
 極暑にて三十八度の地に同情す記録伸ばして我が地も四十度
 すごい技ブレイクダンス・スノーボーも大胆な中に繊細さ見る
 パンパンと華やかに咲く遠花火消えゆくさまは儚なく虚し

佐藤 靖子 東京

研がれたる刃のやうな久方の月見る暇のありやゼレンスキーに
 無無無無無 無無無無無無無 言葉なきロシアへの怒気アンチプーチン

九月号 十首選

冬雷集 益坂 順子

老境といふにとつぷり浸り込む日々か
 何やら薄くて軽し 大山敏夫
 「またね」とはいつの事かと思ひつつ
 帰りゆく息子見送るわたくし 富田真紀恵
 何処よりか種の来りて街路樹に紛れて
 育つ枇杷の際立つ 青木初子
 水きよき与謝の浜辺に寝ころびて寄せ
 くる小砂利の音にまどろむ 天野克彦
 犬曳く人散歩する人ゆったりと津波の
 記憶の眠る閑上 高松美智子
 足元に踏まれて咲ける蒲公英と風に我
 慢の綿毛が光る 嶋田正之
 一人選ぶに十数人を立つるあり制度を
 愚弄すとぞいふべき 稲田正康
 ぐらぐらと揺れる心の錨なれ検査の狭
 間に歌ひとつ詠む ブレイクあざき
 屋の窓よふけの窓に聞く音のいづれも
 淋しひとり聞く音 古嶋せい子
 金にならぬ為事たのしと人の言ふなる
 ほど買へぬ幸せのあり 姉川素枝子

九月号 十首選

九月集／残響集 山口 嵩

種芋をニキロ植えたるジャガ薯の世話
 入らずにて十キロとなる 梶尾栄子
 パラパラと落ちてきた雨遠慮がち猛暑
 を凌ぐ雨にはならず 石渡静夫
 土寄せのつちにまみれてガマガヘルの
 そり顔出すじやがいの畑 佐藤幸子
 母さんが読んでくれると幼言ふ「ほた
 るの墓」をしつかり持ちて 吉岡松世
 「回覧」はスマホに届く「訃報です」
 屋食の卓の上に震える 藤田英輔
 ひとこと希望とちから吸ひ込みて治
 療を受けつベッドの上に 齋鹿ミヤコ

白鷺の二羽が寄り添ひ連れ立ちて低く
 飛び行く重き梅雨空 須藤紀子
 水平線猛暑でにじみ初鳥が空に浮いて
 いるような午後 片桐美穂子
 たつぷりのおろし生姜に葱大葉これさ
 え有れば食欲の増す 金子八重子
 今日こそは気になる死角の掃除をとこ
 わごわ覗くテレビの裏側 首藤文江

世界一長寿の糸岡富子さん富岡製糸にゆかりのありや
ちよつと待てちと待てと日にいくたびも注文多き猫に言ふなり
さて薬のまねば忘ると思ひつつすぐに飲まねばやはり忘れつ
朝顔の行灯作りの杵あれば一本だけのゴーヤに使ふ
伸びきたるゴーヤの蔓のさまよふもいつか輪型の杵にゆきつく
風により触れたるところに絡むらし蔓の力と思ひをりしが

鈴木計子 東京

児童らの鉢の朝顔暑さにてみな萎れをり選挙にゆけば
釣銭にありたる北里柴三郎はじめましてと財布にをさむ
釣銭にありて会ひたる柴三郎梅子栄一いまだまみえず
画面での鐘と重なり響きたりわが市の八月六日のサイレン
ただ暑き日の涼しさは水しごと鍋にやかんが綺麗になりぬ
三十度割ればたちまち食の欲もどる吾にその日はよ来よ
ゆるやかな坂道こゑして頑張れとおのれ励まし自転車の過ぐ
ゆるやかな坂道前後に子ら乗せる女性がペダル軽やかにゆく

須藤紀子 埼玉

大木は終はりにすると白蓮を夫は伐りぬ真夏日の中
白蓮の逞しき枝葉地に敷かれ日差しに焼かれ乾びゆくなり
外気温下がらねど今日の空の色薄雲刷きて秋の兆せり
あの人もこの人も夫の介護とか月々に会ふ人の減りたり

徘徊を続ける犬を抱きとめて撫でをればやがて眠り始めぬ
老犬を抱きて撫でればくうくうと幼な返りの甘え声する
目覚めては温もりあるを確かめる食少なくて骨浮く犬の

大野茜 神奈川

咲き終はり枯葉となりぬフリージア十一代目の球根を掘る
一歩づつ進めてリフォーム完成し無口の大口も最後は笑顔
豊作と喜びあたるレモンの実次々落ちる蟻が幹這う
根分けして三つの鉢の胡蝶蘭忘れた頃に芽吹きの見えて
わつしよいと子供御輿の通り行く囲む大人は二倍を超ゆる
夏来れば「帽子被りて行きなさい」懐しき母の声が聞こえる

早乙女イチ☆ 栃木

小雨降る青葉の中にふつくらとキンカン生りぬ大豆位に
ミカンの実数多に生って重たげに下がっているよ挽ぎ取ってやる
今日もまた長茄子が取れうれしくてやき茄子にして夕食にたべる

卯嶋貴子☆ 東京

ふかみどりの葉の中にかくれて黄緑のまだ小さな柿の実見える
ペランダの鉢植えの植物は猛暑の中を元気に生きる
この夏は雨戸もガラス戸もカーテンも朝から閉めて熱暑対策
足折れて保護したカラスに一日中クーラーかけて酷暑を凌ぐ
この暑さいつまで続く一日中クーラーのなかもうすぐ彼岸

九月号 十首選

作品一 石渡 静夫

朝もやの晴れゆき家並みの浮きいでく
過疎進みをれど故郷うつくし

田端五百子

大賀ハスの葉群そよがせ吹く風の上をモ
ノレールは静かにゆきたり 野村灑子
天に向かい真つすぐ伸びたる立葵梅雨
明け間近勢いの増す 野崎礼子☆
来し方を振り返りみれば我人生大勝は
なし大敗もなし 倉浪ゆみ

夕暮れに早く仕舞えと畦に立ち明日明
日と言う夫だった 松中賀代☆

ざりがにを釣りし小川の既になく荒草
茂る排水路となる 本郷歌子☆

木を切れば土鳩に詫びて池を埋め墓に
も詫びて独り居保つ 永光徳子☆

暮れ近く立木に戻れる雀らの賑やかな
るを時に羨しむ 大塚照美

娘来て夕食作りくれるあじ料理上手
だった姑の味 吉村昌子

どのように妻に言おうか迷いおり病院
帰りの車の中で 山本三男☆

九月号 十首選

作品二 大塚 亮子

続柄「姉」と幾度書いただらう入院を
なす妹のため 本間志津子

エゴの花散りしく尾根に心地よき風を
受けつつ足運びゆく 益坂順子

雀の巢ひな諸共に蹴落として鶴直ぐに
己が巢を架く 小林貞子

出身地聞かれていつも言ひよどむ生地
は父の転勤先にて 佐藤靖子

シニア会の七夕に向け「転ばない」「寝
たきり御免」の短冊吊す 山本述子

条件は二十五メートル泳ぐことサー
フィン服は男物S 藤田夏見☆

栗のはな匂ふほとりの柿若葉ひかりつ
つ抱く小さ粒の実 三好規子

ミモザの黄山吹の黄たんぼの黄終れ
ば夏山に白の花咲く 植松千恵子

飛び入りで太鼓叩けば若者とだんだん
だだんひびき合ひたり 松本英夫

短冊に願ひごとは書かねども今宵は七
夕星空見上ぐ 西村邦子

この夏は暑い暑い毎日でまだ終らない秋は何処から
初めて植えたるオクラはたくさんの実をつけて今朝も我家の食卓賑わす
オクラの花に隠れるようにカエル居てじつと目が合う我も動かず
黄金色に風に揺れるように稲の上トンボ群れ飛ぶ九月の真夏日
日中の暑さそのまま夜になり鳴き始めたる虫の声する
起き抜けの湿気のない空気心地良くほんの少し季節が進む
気がつけば何時しか蝉の声消えて何やら寂し暑さ厳しく

短歌会守り育てし人の逝く糸賀会長八十七歳
会長は秘めし悲しみ見せもせず笑みを浮かべて語りいたりき
就活はオンラインなり深夜二時孫の面談続くことあり
本命の社より届く吉報はお盆の中日にぎわう夜に
晴れ晴れとニューヨークに発つ孫送る八月下旬熱きハグして
猛暑ゆえ二ヶ月遅れの庭の手入れ「陽がまだきつい」庭師ポツリと
暑くても虫は季節を知るらしく今宵混声響きあいたり

商店街のレンタルスペース利用者より雨漏り酷いと連絡のあり
昨晩の大雨により一階と二階の床はびしょ濡れらしい
一階のトイレは天井の電気穴より水がポタポタ使用不可と

度々の雨漏り対策に奔走した友に感謝すれど心は晴れず
会館の雨漏り対策どうするか資金繰りなど頭の痛し
直近はエアコン修理優先と業者手配を友に依頼す

部屋の壁小さきヤモリの現れて捕らえる手を避け素早く消える
トイレの壁玄関脇と場所を変え未だヤモリは外へと行けず
冷蔵庫の卵もレタスも使い切り明日からしばらく沖繩旅行
阿嘉大橋こわごわ覗く海面にウミガメ泳ぐ姿の見える

北海道家族旅行

東京駅迷わず娘とその家族集合場所にピタリと到着す
約束の北海道旅行果たさんと娘家族と新幹線に乗る
気に入りの弁当それぞれ買って乗る新幹線の振動滑らか
新幹線が趣味だと話す悠君は速度三百キロ越えたと喜ぶ
洞爺湖温泉湖上の花火目の前にて部屋から眺める旅の贅沢
昭和新山熊牧場檻の熊達は動作緩慢愛嬌たっぷり
広大なノーザンホースパーク自転車に孫と二人乗り息は合わねど

雨上り急ぎ出かけるポスト迄封書を入れるとにわかに風雨
ドラマ見て役者と同時に空を見る月涼やかに輝きており
アップルパイ万平ホテルの名物もらいハーブティ注ぎ暑さ忘れる

作品 三 天野 克彦

アウシュビッツ訪れし時拾いたる落葉
の二葉いまも手元に 新井光雄☆
記録的暑さの今日は唐突にまな板と鏡
磨いてみたり 小田原禮子
病室の窓より夫は吾を見て小さく手を
振り笑顔くれたり 津田美知子
東北は今日梅雨に入り沖繩の開けたる
を聞く列島長し 佐々木政子
しつとりと重たきに謝す冬雷の合同歌
集はわが宝物 奥山清子
法要の和尚に唱和する子らの透きとほ
る声兄に届かむ 井上鈴子
引き潮の安芸の宮島鳥居のそばで小
なカニの子拾いてさわざぬ 谷田律子☆

出張よりバンダのような息子帰宅言葉
少なく疲れいるらし 高藤朱美☆
雨上がりこの夏に聞く初めての蝉鳴く
声にしばし聴き入る 羽田孝輝
赤とんぼ群れ来る畑に手を休め友と眺
める梅雨の晴れ間に 越澤太郎☆

歌集 / 歌書
御札
編集室・佐藤靖子

■堀信太郎歌集 『簫雨』

令和六年三月三日発行、二五二首の、
持ち心地よい作りの本。タイトル、見
出しすべて雨の名だが、雨ばかりの集
ではない。雨の降る日は魚の活性があ
がりよく釣れるからと言うのが雨を好
きになった理由らしい。四季それぞれ
の雨から異なる示唆を受けつつ詠う。
先ずは雨のうたから。

殺雨梅雨驟雨秋霖寒の雨 吾を鎮
めむと雨垂れを聴く
霧雨が視界を閉ざす川岸に旧き孤
舟の見え隠れする
夕立ちにはピアノの音にかき消され
「別れの曲」が初秋を告げる
吾が影の中を這ひゆく蠅の終の
旅路にそぼふる 『簫雨』
手を広げ空を見上げる天気雨 昔
のやうに笑つてみるか
先行きの見えぬ夜は更く猫の毛に

高齢者は今日も猛暑で外出禁止高校野球の若さ爽やかなのっぺりと増水した川流れ行く水音も無く只押される様に出来たての大エビフライ届けられ食が進んでキャベツも美味しい

松居光子 三重

家庭科の宿題持ちて来たる孫とミトン型の鍋つかみ作るゆつくりときこちなき針の運びにも鍋つかみ出来て満悦の孫恙なく日日過ぎしみる幸せを謝しつつ迎ふわが誕生日とりたてて御馳走もなき生日に赤飯炊かむと小豆茹でをりノロノロと進む台風の情報に翻弄されたるこの一週間離れたる所にも大雨もたらせる奇妙な台風に振り回さるる少しづつ日没の早くなりてきて猛暑の中にも秋は近づく

野口秀子 山形

「四季の雨」なめらかな文語の心地よく音色もやさし朝の厨に友と帰る車窓に稲穂の倒るるを憂ふるは農に勤しみし顔百町歩の田んぼ農家の経営を二人で語る数字を追ひて政府買上米の金額如何に銘柄も品質も天気も左右されるを一反に十俵穫ればと計算す銘柄選びと気候に係る見舞ふたびに衰ふる夫は呼び掛くる娘にも孫にも反応幽かこんなにもこんなにも多くハイビスカス咲くは今年の猛暑を語るいつしらに紫紅の色の冴え冴えとカトレア咲ける草藪の中

齋鹿ミヤコ 神奈川

江の島に続く水平線を見つビルの向かうを指差されつつ窓のしたスーパ―薬局お寺墓地とほくは江の島見ゆる八階八階の朝のペランダ五六羽の雀しばらく遊びてゆけり目標を千から二千にして歩くエレベーターまで往復八十八階のふたりの部屋にひとり居て出てゆく日までベッド埋まらず隣も我が家も庭の草伸びつ小道を覆ふメヒシバの群れこの年に初めて実りし鉢のレモン立ち枯れてをり白骨のごとく

西村邦子 兵庫

大股で前に行く孫振り返り何も言はずにゆつくり進む突然の雨に駆け寄り男の孫に傘をかざる腕を伸ばして駆け寄りて傘をかざせば男の孫は「いいよ」と一言足早に行く洗濯物取り出し底に光るもの五百円玉が一つ残りぬ

早朝のラインを何度も読み返す自分のために学ぶと言ふこと「費やする苦勞を次の展開に」（労ひに添ふる師からの言葉）

江藤ひさ子 大分

詠めぬのか詠まざるのかや今月も未だ詠めずにべ切迫る咲き盛る丈の高低さるすべり低き二本は独り生えにて白百合も独り生えにて今年また見上げる丈に庭の其方此方チュンチュンと槇の梢に餌を待つ朝が来たよと雀らの群

触るるが如き雨の恋しき漢字だけの歌があった。掛流無料混浴定員九浅虫温泉駅前足湯

良い景色。

かもめらは風の族か揃ひ立ち海鳴りの日の風上を向く
深き井の底から見ゆる丸き宙（ま）星
一つ見るさいはひのあり

赤への連想。

右寄りの山の枝葉が一斉に靡いてるから赤紙が来る

（彩雲叢書第11編 書肆露滴房刊）

■加藤健司歌集

『方程式じゃ愛は解けない』

歌歴は三十五年ながら、二〇二三年一月から十月までの作品から六〇三首を収めた第一歌集。令和六年五月二十三日発行である。思惟の流れを切り取ったような作品群から六十代の心境のようなものが伝わってくる。著者の人物像のような歌から。人々は大抵前を見ていないふつからぬよう私が避ける

支払いが現金のみのカフェがあり居心地良さに通う嵐山動物は病気になるば死んでいく手術も薬も僕には要らない自由には自分の意志が必要で自由の中で立ち止まる吾作歌への気持も多く詠まれている中の一つ。

生涯に与謝野晶子は四〇五万首詠んだと知って血潮が滾る生活の中のおかしみ。

のり弁のきんびらごぼうの存在が君のようだと言えばふくれる九歳は言葉遊びの天才児 パンダはクマ科泣ぐ子はイネ科机から転がり落ちた消しゴムを「ない」と割り切る五分探して日曜日シーフードヌードル待つ三分妻が出かけたあとのまったり今の世に。

デジタルに弱い人種は置いていく便利が不便なデジタル格差新聞の9-10は悲劇なり1-10の救いを読まん

結句を少し工夫して、味わいが良く

グループでは最年長の九十二歳週に二度為すランドゴルフ
一ホール・四ホール目にてホールインワン今日も爽快ランドゴルフ
吾の為すすべてを許容してくれる夫に只々感謝する日々

藤田 英 輔 ☆ 高知

朝ドラのロケ始まりて男前はあの「アンパンマン」の作者の役だ
五歩歩く独りで歩く「歩くのはこれから永いよ」力む幼に
朝顔は「しぼむ」紫陽花は「しがみつく」花の終わりを言葉にすれば
「面会はコロナ規制で禁止とす」病院に又貼り紙の有りて
「尻腐れ」「曲がり」が多いと声聞こゆ甘とう穫りの始まりて直ぐ
ストリートダンスを踊るレジ袋適度な風を上手に拾い
そら豆は扁平さゆえ転がらぬ丸く育ちて過たぬため

石渡 静 夫 ☆ 茨城

台風は東海地方の沖にあり風雨で痛める日本列島を
綿飴を千切ったような白い雲浮かんで気温は三十四度
限りある命を惜しむか法師蟬息つきもせず鳴き続けおり
法師蟬あちこちの木を巡りいる別れの挨拶しているように
隣家より庭の工事の騒音が響いてきたり午前八時に
我家でも三か月前に工事せり迷惑掛けるはお互い様か
掃き出しの窓から朝日射し込んで暑い暑いと今日も始まる
未来など明るいものとは思わずに「若者たち」を歌ったあの頃

作品三

八月六日

水澤 タカ子 山形

サイパンに果てにし兄の手紙出しくり返し読む八月六日
ちちははを手伝ひをるかと思ふ手紙戦地にあれど兄の思ひは
八月六日原爆投下の刻丁度申し合はせて梵鐘鳴らす
平和の鐘を子が撞き孫撞き曾孫が撞く頃小学生が鐘楼を占める
被災せしも生きのび得たる元看護師の往時を語る原爆の地獄
いのちの塔と頼られし広島赤十字病院の映像沁みて見つむる
医師達にとりても未知なる原爆症レントゲン映すも全面真っ黒

中東回想

新井 光 雄 ☆ 東京

ナイル川のクルーズ船上ダンサーが踊りを誘うベリーダンスを
バーレンで麻雀すれば「中と東」常にドラなり驚き大敗
レバノンのホテルに泊まるにその近くカジノで自爆五十人死す
アルジェのホテルの朝に聴く祈りこれぞアラブと異境に興奮
マラガからタンジールへの船の旅これぞ海峽マダガスカルなり
モロッコのアトラス山脈車窓には絶望的にも冴えて満月
夕焼けのリヤドの書店に求めたるコーランを手に仰ぎしモスク
一行もいや一字すら読めぬ本聖典コーラン本棚に在り

なつたと思う歌。

マスターの短い言葉と低い声話を
聞いてくれる珈琲

(公益財団法人 角川文化振興財団刊
叢書第109篇)

■長澤ちづ歌集

『振り子の時計』

令和六年六月十一日発行の第六歌
集、五〇八首を収めている。身の回り
では愛犬のこと夫の輪禍、歴史的には
戦争などへの思いが伝わってくる。そ
して折折の歌から、何か甘やかな空気
の漂うのを感じた。

愛犬ユイ。

竹踏みの竹を枕に机下の犬なんだ
かんだと私の傍に

海見える丘までずんずん行きたき
をかえろ帰ろと道えらぶ犬

十キロのユイの重みをなつかし
み 秋田小町を抱きかかえたり
輪禍。

男某で救急搬送されたれば本人確
認為すは妻われ

生と死のはざまを揺るるふらここ

を夜更けの虚空に見つめるわれは
戦争。

護衛艦「あさぎり」「むらさめ」雅

語に呼び人は心のバランス保つ
爆発音におびえて暮らす子ら居る

に何の愉悦ぞ爆発動画
戦死者の未だ埋もるる南部の地そ

の土をもて辺野古埋めるや
神経のありどころに惹かれる。

水平線は届かぬ言葉のごと退るわ
れ若く養母の悲哀知らずに

山荘の食卓の上うつつすらと去年の
時間がうかびていたり

甘やかな時の流れるような。

吹く風が草になつたか夕暮れのえ
のころ草が風になつたか

シャボン玉ひとつひとつが映しい
る五月の空よ空の子供よ

最後に力強い歌を。

列なりて遡りゆく波濤の秀のたて
がみ雄々し日野川河口

日野川を男性的抱擁力のある川と感
じたことがある。川は男性名詞らしい。
(ふりむ叢書第二十四篇 短歌研究社刊)

ペルシャ湾の石油掘削井に立ち眺めるタンカー原油を日本へ

奥山清子 山形

運転の免許更新時来たり「高齢者講習」慎みて受く

「お盆花」と昔呼び居し姫檜扇抱へて供ふる八月十日

「カルメン」に陶醉したる夏の夜ミカエラ役は隣家の娘

ペランダに青葉もみぢの枝掛かり緑風送り呉る外は三十五度

退院の夫の衣類を濯ぎ干す庭に咲きそむ秋海棠淡し

締め切りに元気を貰ふ歌と書と無念無想の時を楽しむ

夜祭りの人影も絶え鎮もれる上弦の月が獅子を照らしぬ

谷田律子 ☆ 栃木

アジサイとカサブランカを覆う草息子がかまわず草ごと刈り取る

日本画は沢山学ぶ事のあり頭の体操認知の予防に

柿の実の多数生りたり今年こそカラスの餌にならぬよう

もちの木赤い実すずなり大木にて幼い時に噛んだ思い出

九州の母方の祖母に会いに行く孫におみやげ持たせて見送る

井上鈴子 山形

長雨に伸びたる草の溢れゐて乾季の大地に分けてやりたし

おつとりの子に掛かりたる鱈三匹あまりに小さく天麩羅にする

夏休み空き地に体操の児童来る幼き子らも後につつきて

スポ少のバレーボールに励む子は『ハイキュー』のモニュメントの前に笑む

足の指の血流のため履く下駄の鼻緒は鹿の子母買ひくれし

アイロンを掛けつつ流るる大粒の汗のあとには猛烈な頭痛

ああこれが熱中症かも知れず体中より吹き出す暑さ

佐々木政子 岩手

願ひもち顔を近づけ真向かへば領ぎ給ふ如意輪観音

天上の白雲動かず地の木の葉少しも動かずひたすら照りをり

夏のうち早起きをして体操をと脳はせかすも身体反抗す

突然に大粒の雨降り出でぬ今干したるを急ぎ取り入れぬ

久々に田圃道ゆけば古里の庄内平野の稲田偲ぶる

三日月のカーテン越しに見えたれば窓に寄りゆく淡き朱の色

音のしてふり向けど人あらずして青柿一つ道に転がれり

山崎 猛 ☆ 埼玉

今朝の体気怠くあれど使命感よぎりて暑さとそれを忘れる

空調の部屋から暑き昼下がりに予定表持ち車へ乗り込む

友からの半寿の祝いの同窓会皆で会えたと感謝の電話

同窓会八芳園にて二十六名佐野からも来て盛会に終わる

これからも機会があれば会いたいと皆から言われホツとするなり

出席がかなわぬ友から寄せ書きなど送ってほしいと電話あるなり

塚本節子 ☆ 茨城

息子よりチケット届くロンドンへの出発前日スマホの中に

夫行けず長男と行くロンドン未知の旅なり七十五歳

末息子の送りくれたるチケットは両足延ばせるゆつたりの席

■ 訃報…………… (編集室・大山)

つつしんで短歌の友らを送る

今月もまた幾人かの友らの訃報が入った。その都度に、幾つかある会員名簿を引き出し、思い出に浸り、共に頑張ってきた「冬雷」刊行の日々を頭の中に巡らせる。これは実に驚くべきことなのかもしれないが、あらためてすでに鬼籍に入られた方、又は事情あって退会されてその後を存じない方の何と多いことか。否、驚くに当たらない、創刊六十三年を数える短歌雑誌ならば、その歳月の重みがそういう事実を自然に積み上げるのだ。

さて、余分なことを言っても仕方がない。事務局に連絡が入った今月の訃報など、ここに報告させていただくことにしたい。

少し前に伺っていたが、あらためてご遺族よりのお知らせの届いた「永田夫佐様」について。永田様は二〇二〇年に倒れられ緊急入院、その後回復せずこの六月八日に永眠された。実の妹

の山田和子氏の作品に、

目を開けたのと長女はとても嬉しもうゆつくりでいい姉の回復

とあったが、その後意識は戻らずのことのようであった。数年に及ぶ闘病とご介護のこと、大変なことであったと思う。永田夫佐様は昭和五十四年十一月に荒木米子氏の紹介で入会され、すぐに母親の日下部富美氏、妹の山田和子氏を誘っている。ご息女の山口満子氏も誘い短歌一族であった。

ねずみ花火庭へ放ちしほろ酔いの父の面影迎え火を焚く 永田夫佐 ☆

永田様長い間お世話になりました。ご冥福をお祈り致します。

茨城支部を引き継いで牽引していた大久保修司氏の紹介で、二〇一三年三月に入会された「豊田伸一様」について。紹介者の大久保氏は二〇二〇年に亡くなられたが、豊田様は二〇一八年に作品二欄へ昇格し、以後順調に作風を太らせてこられた。だがお体は病みがちであり、治療中の病が重く余命五ヶ月を宣告されていたところ、実際

ANAのラウンジ利用は初めての経験にて少しリッチになりぬ
国際線羽田空港ターミナルテレビの伝える体操の「金」
十五時間の飛行の長さその間「猿の惑星」の映画観ており
漸くにヒースロー空港に到着す気温二十五度とアナウンスあり
空港の入国審査の係官に厳しい顔にて目的聞かるる
息子から送信された目的の回答示せば係官OKす

井出 裕 子 静岡

四十年前小きき学校に赴任してたつた七人の担任となる
教へ子と四十年ぶりの再会に思ひ溢れて言葉探せず

我が家に近き居酒屋選び呉れぬ吾の年齢を氣遣ふなりや

七人のその後の四十年聞けど我には変はらず四年生の児ら

孫あると写真見せつつ話す子の跳び箱とべずと泣きしを思ひ出づ

奈良に住み来れぬ仲間とビデオ通話全員揃ひて祝杯を上ぐ

未熟なる我をまつすぐ見詰め続けて呉れし子らを今まぶしく見てをり

パラリンピック後前線に戻り祖国のため戦ふといふウクライナ選手

立石 節 子 東京

五時起き目の目に飛び込むはイワシ雲七月の空北のかなたに

あちこちのポスター眺めいるのみで花火大会へ行くこともせず

葬儀にて君の遺影を見詰めおり恋し続けて六十二年

久しぶりに見る生サンマほっそりと物価高にて安値感あり

孫たちのピアノ教室発表会この幸せの長く続けよ

年若きピアノリストの眼 はにかみて氣負いも見えて遠くを見詰む
礼拝者の半数近くが受け取りぬ八十歳以上の敬老カード

金子 八重子 千葉

大食いの勢力増してこの夏も孫台風は我家を直撃

孫等との集合写真の背比べは到頭今年は我が最小

青空は不気味な雲に覆われてゲリラ豪雨を呼ぶ風冷たし

ひまわりは全身黒くうなだれて酷暑に耐えて役目終えたり

そうめんと冷し中華は食べ終えたのに残暑まだまだ九月の半ば

連日の人手不足のシワ寄せはパートに迫り不穏な空気

涼しさに食欲湧きて秋茄子の揚げり具合を箸先でみる

越 澤 太 朗 茨城

ばら蒔きの種は殻脱ぎて一ヶ月畑一面に蕎麦の花咲く

四面の畑それぞれに花咲けど土壌生育差別ありあり

収穫は七十五日その日まで遅れいる畑に追肥せんかと

蕎麦強し雑草生える余地はなく猛暑凌いで花咲かせたり

草刈ればバッタ蟋蟀飛び跳ねて初秋の畑は祭りのごとし

シニア会の蕎麦打ち教室に提案す常陸秋そば旨し旨しと

農道の草薊りに残した薄群れ中秋の名月に今年も飾る

後 藤 恭 介 茨城

七夕の短冊に「世界平和」ありいつまで続く争いの星

「雲の峰」夏井いつきの俳句ライブ俳句の道の新世界かな

には一年九か月頑張られたということ
をご遺族からの話で知った。その作品
は明るく力強いものが多い。

散歩中知人の家呼びこまれ朝のコー
ヒーで話題たっぷり

嫁ぎ先に娘の顔を見に来れば隣の畑
に白鳥の群れ

八月四日逝去、享年八十五歳。ご冥
福をお祈り致します。

「高嶺」廃刊後に小誌に二〇一八年
に移られた「高田和子様」について。

巣鴨駅近くの六階ビルがお住まいだと
いう歌が印象に残っている。入会当初

は月例歌会にも出席されていたが、体
調を崩されて欠席がちとなり、作品も

二〇二三年には休詠となっていた。

三階に用ある時に二階の物持ちて来
たりて階段のぼる

二〇二二年二月二日道のべに二輪
のつっじそのみ咲けり

童謡を覚えた孫が電話にて十曲うた
ふその清きこゑ

八月十五日、乳癌にて逝去。ご冥福
をお祈り致します。

ネット歌会をしよう。

◆ご案内

冬雷ネット歌会
冬雷短歌会の「ネット歌会」会場です。
閲覧はどなたでもできますが、歌会への出詠とコメントの投稿は冬雷会員のみに限定させていただきます。
投稿の際は「冬雷」誌上名をお願いします。
(匿名・ハンドルネームを禁止)
冬雷ネット歌会に強い、大いに勉強しましょう。

著作権 © 2022 冬雷ネット歌会
(入室にはパスワードが必要です)

※ルール

- ①参加者は批評期間中に少なくとも1回以上のコメントを投稿しましょう
- ②作者のコメント期間には批評に対してお礼の挨拶をしましょう。ネット歌会は勉強と交流の場です。
- ③投稿者名は冬雷誌上名でお願いします。

り出す」としたのですが、言葉の意味を考えるとご指摘に納得します。では どうするかです。

Re: 詠草 3 - 稲田正康 2024/09/23(Mon) 11:59 No.5770

3-2. 海が波を「繰り出してくる」という感覚は分かります。ただこのお作は「その波に乗っている」状態で、「海のありさまを眺めている状態ではありません。それと、微妙なところですが「繰り出す」と「繰り出せる」は、違います。完了の助動詞「り」がはいっているからです。ここはやはり「繰り出す」とするところでしょう（。臨場感、現在感が違います。

詠草 6 投稿者：冬雷ネット歌会 投稿日：2024/09/18(Wed) 09:11 No.5736

9月号 松本英夫

飛び入りで太鼓叩けば若者とだんだんだんひびき合ひたり
三味線をバチのたたけば左手のくきくき踊る津軽じよんがら節

Re: 詠草 6 - 藤田夏見 2024/09/19(Thu) 10:45 No.5746

一首目

飛び入りで若者達との太鼓の共演、叩くにつれ気持ちの昂りが、だんだんだんと響く音にあらわれ作者の楽しさが伝わる。情景の見えるような歌ですね。

二首目

連作の津軽じよんがら節の実演。この歌に演者を見ているような気持ちになりました。作者は近いところから見る体験をされたのかな と思いながら、前の飛び入りの歌の後の作 という事で、一読 三味線を体験されたのかと読み返しました。

Re: 詠草 6 - 稲田正康 2024/09/23(Mon) 12:59 No.5773

6-1. 「だんだんだん」はリズム合わせがうまく釣り合って、その場の気分もあらわしているが、その分「寄りかかり」になっているだろうか。「擬音語」は難しい。

6-2. 独特の「津軽三味線」のうごき。その、叩きつける撥ではなく左手を「くきくき踊る」とは珍しい表現。

Re: 詠草 6 - 大野 茜 2024/09/24(Tue) 21:26 No.5789

1 首目 飛び入りで太鼓叩けば若者とだんだんだんひびき合ひたり

飛び入りで祭りの太鼓を叩ける若さが素晴らしい。それも若者との調子が合うまで続ける頑張りには更に凄い。年令だからと腰がひけてしまう自分と比較してしまう。私にも頑張らねばと思わせてくれる良い歌だ。

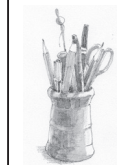
Re: 詠草 6 - 桜井美保子 2024/09/25(Wed) 17:49 No.5796

一首目 飛び入りで太鼓を叩くという心意気に感動しました。若い人が打つ太鼓と響き合うって素晴らしいことじゃないかと思います。擬音語から太鼓のリズムや音が想像されて楽しい一首です。

二首目 左手は三味線の糸を押さえているのだと思うのですが。踊るように見えるのですね。演奏に惹きつけられている様子。芸事の手動きは魅力的だと思います。それをうまく表現している作品でした。

(9月ネット歌会の中より抜粋・編集室)

編集
後記



▽九月のネット歌会に初めて谷田律子さんが参加して下さったのは嬉しかった。実際にコメントを入れてもらったのは批評への御礼のひとつことだったが、作者の熱心さが伝わってきた。

▽二〇二〇年六月に始まった冬雷ネット歌会も四年が経過。内容の一端が本号で紹介されているのでぜひご覧いただきたい。自分の作品をネット歌会で批評してもらいたいというご希望がある方は、まず係の桜井までご連絡ください。その場合批評が全て終了した後には作者からの感想を一行か二行投稿していただくだけでいいので、迷わずご参加を。ネット歌会は自由参加であり、一回のみの参加と都合のいい月だけの参加も歓迎している。勉強と交流の場を大切にしていきたい。(桜井美保子)

▽宮崎県の地震を受けてお盆前より一週間、気象庁から南海トラフ臨時情報が発表された。いつ大地震が起きてもおかしくないことを常に意識して備えるように。そのため米の買い占めが各地で起きた。店頭に米が無くなり令和米騒動とか。今月四名の会員が歌に詠んでおられる。米処である筆者の地でもスーパーの棚から米が消えたのには驚いた。確かに備えるべきと思うが何か腑に落ちない。▽大会が近い。次に会えると思っていたら亡くなってしまわれた方々。貴重な機会。(橋美千代)

▽堅実な雑誌運営について議論して行くことになる。状況に応じて、その規模相応の雑誌作りを目指したい。力を合せ工夫すれば、自ずから道は開けるものと信じる。▽さて冬雷大会が近い。今年もホテルルートイン東京様のご協力を得て開催できることを喜びたい。充実した楽しく貴重な一日になることであろう。

冥福をお祈り致します。▽第63回を迎える冬雷大会に向けての準備が進んでいる。九月十二日の猛暑の日に浅草橋の会議室に都内在任の編集委員と編集長が集って大会当日の内容について詳しい相談をしたり、現在の課題や今後の事についても意見を交わした。コロナ禍以来メールや電話での連絡が多かったけれど顔を合せての会議はその場の雰囲気も含めて効率的であった。

編集後記

《冬雷規定・掲載用》

- 一、本会は冬雷短歌会と称し昭和三十七年四月一日創立した。(代表は大山敏夫)
- 一、事務局は「東京都葛飾区白鳥四の十五の九の四〇九 小林方」に置き、責任者小林芳枝とする。(事務局は副代表を兼務)
- 一、短歌を通して会員相互の親睦を深め、短歌の道の向上をはかると共に地域社会の文化の発展に寄与する事を目的とする。
- 一、会費を納入すれば誰でも会員になれる。
- 一、長年選者等を務め著しい功績のある会員を名誉会員とする事がある。
- 一、会員は本会主催の諸会合に参加出来る。
- 一、月刊誌「冬雷」を発行する。会員は「冬雷」に作品および文章を投稿できる。ただし取捨は編集部一任とする。「冬雷」の発行所を「川越市藤間五四〇の二の二〇七 大山方」とする。
- 一、編集委員若干名を選出して、合議によって「冬雷」の制作や会の運営に当る。
- 一、会費は年額(購読料を含む) 次の通りとし、六か月以上前納とする。ただし途中退会された場合の会費は返金しない。

*会費は原則として振替にて納入する事。

- A 作品三欄所属会員 一四〇〇〇円
 - B 作品二欄所属会員 一七〇〇〇円
 - C 作品一欄所属会員 二〇〇〇〇円
 - D 維持会員(二部購入) 二六〇〇〇円
 - E 購読会員 八〇〇〇円
- 一、この会則は、二〇二〇年一月一日より執行する。

《投稿規定》

- 一、投稿は月一回未発表9首まで投稿できる。原稿用紙はB5判二百字詰めタテ型を使用し、何月号、所属作品欄を明記して各作品欄担当選者宛に直送する。原稿用紙が二枚以上になる時は右肩を綴じる。締切りは十五日、発表は翌々月号。担当選者は原則として左記。

- 冬雷集・作品三欄(メール投稿分)
 - ・担当 大山 敏夫
 - ・担当 桜井美保子
- 作品二欄・作品三欄(手書き投稿分)
 - ・担当 小林 芳枝

- 一、表記は自由とするが、新仮名希望者は氏名の下に☆印を記入する。
- 一、無料で添削に依じる。一通を返信用として必ず同じ歌詞を二通、及び返信先を表記した封筒に切手を貼り同封する。一週間以内に戻すことに努めている。添削は入会後五年程度を目処とする。

《Eメールでの投稿案内》

- 一、白地に一首ずつベタ打ちにして、行間も空けないこと。頭を一字分空けたり、一首を二行に分断したり、余分な番号を付けたたり、色を付けたりしないこと。分量の少ない場合は通常のメール本文、又はケータイ・スマホでも送信可能。
 - 一、Eメールによる投稿は左記で対応する。
- 大山敏夫 tourai-ooyama@nifty.com
小林芳枝 kysie@nifty.com
桜井美保子 mhoko496@s4.dion.ne.jp

《選者住所》	大山 敏夫	350-1142 川越市藤間	540-2-207	☎	090-2565-2263
	小林 芳枝	125-0063 葛飾区白鳥	4-15-9-409	☎	03-3604-3655
	桜井美保子	235-0022 横浜市磯子区汐見台	2-2-2-608	☎	090-6029-0590

2024年11月1日発行

編集発行人 大山 敏夫
データ制作 冬雷編集室
印刷・製本 (株) ローヤル企画
発行所 冬雷短歌会
350-1142 川越市藤間 540-2-207
電話 049-247-1789
事務局 125-0063 葛飾区白鳥 4-15-9-409
振替 00140-8-92027
ホームページ http://www.tourai.jp

頒 価 700 円